

ネクラとヒリアが出会う時

村田 天



ファンタジア文庫

2996

♥
H

ネクラとヒリアが
NEKURA TO
HIRIA GA DEAU TOKI
NEKUR&HIRI
時

N
♥

口絵・本文イラスト
サコ

プロローグ

◆佐倉総士さくらそうし

女の子というものの可愛さについて少し。

女の子は、みんな可愛い。

まず、骨格が可愛い。骨の音がかつんと、小気味よく軽い感じがする。
高確率で、甘くてふわりとしたい匂いにおがする。

白い肌はだがつるつるで、男みたいに毛がワサワサ生えていない。身体からだのフォルム全体が柔
らかで、丸っこい。手とか小さいし、爪つめも小さい。声も野太くない。とにかく可愛い。

この条件にあてはまらずとも、やはり可愛い。股間こかんに面白おもしろいものをぶら下げてないとこ
ろがなんかもう可愛い。性別をそのパンツの有無で決めてしまっただけなのに、かためられ
る昨今、なんなら付いていても女の子なら可愛い。

可愛いが、苦手だ。

いや、可愛いからこそ苦手だ。

俺は昔からなぜか女の子に異様にモテた。

気がつくといつも周りに女の子がいた。しかし、一向に慣れなかった。

囲まれてきやいきやいされるとどうしていいかわからない。はつきりまっすぐ顔も見られないから誰が誰かもわからない。性別くらいしか識別できない。

この気持ちは贅沢な悩みとしてあまり人にわかってもらえない。

俺は外見こそモテたが、内面は猛烈にモテない男のそれを有していた。

たとえるならば未開の奥地でひとりで暮らす言葉もろくに知らないけむくじやらのモンスターが妖精に周りを飛びまわっている感じ。

「佐倉くん佐倉くん」

「おはよう！ よく寝れた？ 眠いよね」

「佐倉君は朝なに食べた？ あたしはパン！」

妖精は今日も俺の周りを飛びまわる。

こんな可愛い生き物達がなぜ俺の周りに集うのか……嬉しいけれど、まともな会話ができたことはない。彼女達はきつと俺を勘違いしている。このはてしなくつまらない上に卑しく、いやらしい内面を知られたらと思うと言語能力をフルに活用してもだいたい口から「うん」「そうだね」くらいしか出てこない。

気の利いた返答ができず話がまるで膨らまなくても女の子達は俺を囲み、好き勝手に話が続いている。そのうちに大抵は周囲の女子同士で盛り上がり始め、そのまま会話は流れていく。

比較的真面目で育ちのいいやつが多い私立高の穏やかな学年内で、奇跡のように表立って疎まれ憎まれることなくやっているが、女にモテることについて刃を向けられるかヒヤヒヤしている。

モテたって、彼女がいたこともないし、こちらから指一本触れたことすらないのに。

だって軽く偶像化されてるのに、想像と違うなんて知られたら悪い噂が広まるに決まっている。そういうのゲームで見た。だから俺はいつもなるべく表情を変えず、できるだけ無口で硬派なやつを気取ってすましている……つもりだった。できてるか怪しいけど。

はあ、と小さく息をつくとき周りの女子がほうとため息を吐いて見つめてくる。うわあーみんな唇がツヤツヤしてる、気がする。首が細い、気がする。うあーうわー。目玉カメラはガタガタのブレブレでピントなんて合いもしない。自分の頭の中身が漏れ出てるような感覚に猛烈に恥ずかしくなって席を立つ。

「佐倉君どこ行くの？」と聞かれて arī もしない用事があると告げて、早足で退散。悪霊はあくるよう退散。悪霊はもちろん俺。

俺はつまらないやつだ。
人を楽しませるような話術もなければ、女の子をドキドキさせるような仕草もわからない。
い。

家だってしがない貧乏家庭の次男でしかないし、部屋にいる時は大抵いやらしいことを
考えて暇つぶしをしている一般的な男子高校生でしかないのに。

廊下に出ると少し遠くで唯一の友達がニヤニヤしながら手を振っていたのでそちらに駆け寄る。

荻坂透。

こいつとは中学校一年生からの腐れ縁だ。俺がどんなやつかも十二分に知っている。

「総士、お前、また囲まれてたのか？ あんなにたくさんいて、彼女つくればいいのに」

「無理に決まってるだろ」

「なんでだよ」

「女子とふたりきりでいたら会話が成り立たない！ 幻滅されるだろ！」

荻坂はふつと息を吐いて、遠くを見るような目をしてみせた。

「恋愛なんて幻滅の瞬間の連続だろ。人は人に幻想を抱きそれを壊しながら成長していく……」



「お前なに言っただアホか！」

「あ、おい、ゆりあさんだよ」

数坂が顎をしゃくく方向を見ると、たぐいまれなる美少女がそこにいた。

目と鼻と口と輪郭すべてがリアリテイのない整い方をしている。長い髪もサラサラで、重力をまるで感じさせない。

涼しげではかなげで、美人寄りだけれど、あどけなく残る幼さが可愛さを演出している。この空間にいるのがおかしい。

あれは学年でも有名な、氷の姫、西園寺ゆりあ。

ものすごくぎょうぎょうしい名前。しかしそのギャルゲーの金持ちキャラにしかいそうにない名前に容姿が負けてないのがまたすごい。

氷の女王の娘とか雪女の娘とか、そんな感じの、ほんのわずかな無邪気さを感じるミステリアスさは確かに、氷の姫と言いたくもなる。

「芸能事務所からのスカウト二八五二回断ってるらしいぜ」

「日本に事務所何個あんだよ……」

「そこはあれよ。のべなんじゃねーの」

俺に顔を戻した数坂がニヤつきながら声をひそめる。

「お前ちよつと行って玉碎してこいよ」

言われてもう一度そちらを見る。背中にも羽がないのが不思議なくらいだった。

「む、無理だな……」

女の子はみんな可愛い。話せない。あんな天界から来た天使みたいなのはなおさら無理。全力を振り絞っても挙動不審なマリオネットみたいな動きをしながら「おはよう」の「お」の字も言えないだろう。

「あんなの、絶対歳上の彼氏とかいるだろ」

「彼は四十七人いるという噂がある」

「すげえな。それだけいれば討ち入りできるぞ」

「まあ、でも噂は噂。お前も、九歳の時に出会って悲しい別れをした某国の王女が忘れられないからどんな女も好きになれないって噂がある」

「ははッ……リアリテイがなさすぎる」

「彼は四十七人を簡単に信じてたやつのことじゃねーな……」

「いやあ、あれはいるだろ……あれでそれなら少ないくらいだよ」

「でもな、彼氏四十七人とか、芸能人と付き合つてるとかさんざん噂はあるけど、そのせいか学校内で浮いた噂はまだないんだよ！」

「あー……そうかもな。よほど自信がなければあんなのに告白なんてできないだろ」

「入学当初は、校内でもモテるイケメンが何人か当たって砕けたって話はたまに聞いたけど、最近は静かなもんだよ。総士、お前も試してみろって！」

「嫌だよ。あれだろ、何人かザコを倒してやっと進んだけど、戦ってすごく強かったやつが、残念だったな。ワシは西園寺彼氏十六人衆の中では最弱。残りの者がおまえを討つだろう」とかって……」

「佐倉くん」

死んでも聞かれたくない会話の最中で、可愛い声に呼ばれて心臓がビクウと震えた。そちらを見ると女子生徒が手招きしていた。

「知り合いか？」

「わからん。俺、女子は顔をまともに見れないから……もしかしたら顔見知りかもしれないけど」

「もしかしたら顔見知りってなんだよ。ぜんぜん見知ってねーじゃねえか」

こんな声で呼ばれて用事があったためしがない。ふんわりした世間話のお誘いに違いない。それ自体は嬉しくないわけじゃない。でも苦痛だった。

考えてもみてほしい、役者志望でもなく素養もないのに毎日ステージに立たされる凡人

の気持ち。

俺は女の子の前ではありのままの俺でいられないのだ。疲れる。女の子とは月一で、決まった日と時間に、体調も万全に整えた上で会うならば、三分ほど会話を継続させることができる気がする。会話内容を事前に練ることもできる。Aという会話を提供し、それに対して返ってくるであろう内容をいくつか想定して並べて、シミュレーションしておくことだって可能だ。

でもこんな毎日は無理だ。ボロが出ないようにずっと気を張っているから精神が磨り減る。ストレスで禿げる。禿げたらまた幻滅される。もうどうしようもない。

「ごめん、用事があるんだ」

そう言ってさっと教室に戻る。

しかし、教室にも女子がたくさんいた。何人かが俺のほうを視て。どこかへ避難したい。どうして同じ人間なのに性別が違っただけでこんなに別の生き物感があるのだろう。

ちょうどいい。鞆も持って出て昼食も早めだが今します。そしてお昼にはまたどこかに隠れよう。もう無理。今週の俺の女子通信制限が超過している。

とりあえず今はどこかで、心を落ち着けたい。ひとりで安らかに、口を開けてだらしない顔をしながら低俗な思考に浸れる場所。

◇西園寺ゆりあ

生まれる家を間違えた。

そう思うくらい、わたしは自分の家の家風に馴染めなかった。

名前は西園寺ゆりあ。名字がまず駄目、わたしには雅すぎる。全然似合っていない。名前と内面がそぐわない。自分では「オムライス山やかん」とかそんなふざけた名前が似合うと思っている。

父は服飾関係の会社の偉い人。母は元ヴァイオリニスト。姉はファッション雑誌のモデルをしていたけれど、最近ドラマや映画に出だした。

わたしはそんな才気溢れる家庭で育つのに、ファッションにも音楽にも興味もなかったし、たまに連れていかれる謎のパーティーも苦痛でしかなかった。家族は全員それぞれ別分野でパーティーにお呼ばれることが多く、どさくさ紛れにわたしを連行しようとするところがある。そんなものに行くならジャージで寝転がってバカなコメディ映画でも観ていた。

文化的な家族の中でわたしはひとり、覇気のなくすんだ娘だった。マカロンがずらりと並ぶ中、ひとつだけホカホカの肉まんがマカロンのふりして紛れてるくらい違和感があ

る。しかし、わたしはマカロンより肉まんのほうが好きだ。

とはいえ見た目だけは高貴な雰囲気（き）の家族とよく似ていたため、わたしの恥ずかしい内面を知る人はそういない。

冬が終わる三月。

高校に入学してもう一年も終わろうとしていたけれど、わたしは孤立していた。

いじめられていたわけではない。嫌われてもいない、とは思っている。

ただなんとなく遠巻きにされている。

じろじろ見られることは多いけれど、仲良くはしてもらえない。

たとえば、女子生徒と肩がとんとぶつかった時。普通なら「ごめんごめん」とか笑ってすませるところ、わたしは「ヒエー西園寺さん！ すいません！」と謝られる。

この間もそうだった。男子生徒がやけに緊張した面持ちでわたしに話しかけてきた。

「すいません、ごめんなさい、西園寺さん……消しゴム落としましたよ……」

男子生徒がそう言った時、近くの女子生徒が目ざとくそれに気づいて言う。

「バカ！ 西園寺さんがそんな角の丸い小さい消しゴム使ってるわけないでしょ！」

「あつ！ あつ！ そうだ！ すいません西園寺さん！ 失礼致しました！ この汚らし

「チンケな消しゴムは僕が食べときますね！」

わたしとクラスメイトの距離は百万光年ほど遠い。

ちなみにわたしは消しゴムを限界まで使うので、男子生徒によってむしろ食べられた汚らしいチンケな消しゴムはまごうことなきわたしのものだ。

クラスメイトはみんな、いまだわたしにだけ『さん』を付けて呼ぶし、話しているとなぜか敬語まじりになる。悲しい。本当はゆりりんとかさいちゅんとか、そんなフランクなあだ名で呼ばれたい。

しかしながら明るく輪に入っていく、ひょうきんに愛嬌を振りまき、笑わせるようなスキルも持ち合わせていなかった。

わたしは仲のいい打ち解けた友達相手にはかなりふざけるタイプだったけれど、そんな態度を取られると、さすがにふざけられない。

「さつき佐倉君見たよ！」

教室の端からはじけるような声が聞こえてそちらを見る。

「え、見たの？」

「ひへへ。朝からイケメンで英気を養った」

「うああ、羨ましい！　ていうかなんで！　なんでうちのクラスには佐倉君がいないの

！？」

「あんまり大きな声出さないの。聞こえるよ。ほら」

つられて見ると廊下に佐倉総士その人が背筋もまっすぐに歩いていた。

ただ歩いているだけで人の注目を集める。考えただけで疲れそうなアビリティを持ったその人は視線など気にする様子もなくまっすぐに歩いていたが、やがて女の子に囲まれ進路を阻まれた。

囲まれても女子より頭ひとつ分背が高いので顔は見える。

確かに彼の、ぱつと見の造作は凛々しいのに、どこか危ういような色気を孕む繊細さがある美形だ。おまけに学業優秀、運動でも秀でている。放っておかれるわけがない。

ただ、件の佐倉氏は騒がれているわりに浮名もないし、誰のことも平等に相手にしないようだった。

彼は女性に興味がなさそうところがあつて、話しかけられても、あまり会話に乗ってこないとか、ガードが堅いのだ。それがある種の高潔さになり彼はアイドル化した。勇猛な何人かが振られた後は挑む者もなく、最近ではすっかり皆の共有財産と化している。

「あー、いいないないな、すつごいタイプ！」

「あんただけじゃなくて皆思ってるよ」

そうかなあ。わたしはタイプじゃないな。

聞かれてもないのに脳内で返事をする。

わたしは異性のタイプなら、顔は緊張しない程度に面白くて、性格は優しく、わたしが「ほい」とか「そいや」とか合いの手を入れるだけでもしゃべり続けられる饒舌さを持ち、人目を引かず、牛丼を美味しく一緒に食べてくれる、そんな人がいい。

でも、その前に女の子の友達に欲しい。

わたしはいつも教室で友達同士きやあきやあふざけている子達が羨ましかった。わたしだっと思うさまふざけたい。納豆なすりつけ合いパーティとかしたい。

納豆が食べたい。なすりつけるとか言っでごめんなさい。一粒残らず大事に食べます。

帰りに買おう。わたしはおこづかいでおやつに納豆を買って、こっそり食べている。

我が家の食卓はわたし以外全員の趣味により極端に和食が少ないのだ。

テーブルにはカタカナの名前の料理ばかりが並ぶ。味噌汁じゃなくスープ。なんちゃらのムニエル、なんちゃらのグラッセ、ナントカパツアにウンチャラエツト……嫌いなわけではないけれど、普段のメニューにあまり出てこないものがわたしにとってのご馳走

となっていた。同じビーフならローストビーフやビーフストログノフよりも牛丼が食べた

い。

ぐぎゅるる、わたしの腹の虫が同意した。

牛丼食べたい。

しかし、わたしのお気に入りのチェーンの牛丼屋は近場にはない。もとより進学で別れた中学の友達数人と一緒にじゃないと入る勇気もなかった。

食べたい食べたい。

もう、どれくらい牛丼を食べてないだろう。

どれくらいふざけた遊びをしていないだろう。

中学まで行っていたエスカレーター式の女子学校では友達がいた。親が家を新築して引っ越すおりに新居周辺で一番学力の高いこの高校へと進学した。こんなことなら遠くても前の学校に通い続ければよかった。

ああ、ふざけたい。友達が欲しい。

友達と変な顔しあつてゲラゲラ笑いたい。つまらない。現実、つまらない。

モヤモヤと思うが沈殿した時に行く場所がある。わたしはそこに向かった。

◆ ネクラ

俺は第二図書室の扉を開けた。

この、第二図書室というのは皆がそう呼んでいるだけで、実際は図書室ではない。

年々増えていき図書室に置ききれなくなつた蔵書。その行く先を決めるまでの一時保管所のような場所だった。ちゃんと使用されている図書室と比べて狭いしほとんど誰も来ない。ここは数ヶ月前から鍵が壊れていたけれど、誰も気にしなかったで放置されていた。あるいは壊れたことにも気づかれていない可能性もある。そのくらいの僻地。端的に言うところ穴場だった。

置かれた古い本達のカビ臭い匂いは俺の心を癒した。奥の奥に行つて、しゃがみこむ。クラスにいても、気話まりでしかない。

なぜ俺はこんなにモテるのにモテないのかを考える。これだけモテるならばそろそろ心もそれに即したものになつてもいいはずなのに、実情は悪化する一方だった。なぜ心だけがいつまで経つてもこんなにモテないやつのか。

結局は自意識過剰なのだと思う。

自分の容姿からイメージされている偶像を壊す勇気がないのだ。

さりとて思われている通りの人間を演じられる器用さもない。

たとえば自分の顔が見えないところで女の子と仲良くなれば、自分というものを偽らずに出せるだろうか。

しかし冷静に考えれば、中身で好きになつてもらえるような男でもない。

偽らざる中身を知られたら絶対に好かれない。つまらないから。

しかし、中身を偽っているうちは会話すらできない。

やはり内面からモテる男になるしかない。

意識を変えよう。

俺は一応モテるのだから、意識がモテるようになれば、完全なるモテるやつになれる。しかしモテる内面つてどういうやつだ。わからない。

こういう思考をする時、いつも俺の頭の中には架空の女の子が浮かんだ。小さな藁人形の形をしたその女の子の名は藁子ちゃん。目の部分に『女』の字が書いてある。俺の頭の中の『女の子像』の塊である彼女は、俺にいつも女の子のなんたるかを教えてくれる。

俺の中の女の子人形、藁子ちゃんが軽薄な声で言う。

『女の子はー、優しい人が好きー』

それだ。

間違いない。
間違いない。

親切。一日一善。悪いはずがない。

菓子ちゃんは正しい。

ここから始めよう。モテ人生。

そんなことを考えていると、扉のほうからガタンと音がして心臓が跳ねた。

この息の音、足音のリズム。そしてほのかな香り。

間違いない！ 女子生徒だ！

まずい。なんでまずいかわからないけど、俺がこんなところにいるの見たらまずい。

第二図書室はとても狭い。なにしろ本棚は一列しかない。みっしりした大きめの木製の本棚と、その奥にパイプの安っぽいのがひとつだけ。入口から俺の姿は、みっしりした本棚が壁となって見えない。

女子生徒は俺が本棚を挟んだ隣にいたことには気づいていないらしく、可愛い声で「うん」と伸びをした。俺は反対に縮こまって息を殺した。

それからため息混じりにこぼすのが聞こえた。

「あー、納豆食いたい」

納豆？

女子生徒の声は確かにそう言った。あまり聞かない種のひとりごとだ。

女の子は皆チョコとケーキとアイスが好きなものではないのか？ 菓子ちゃんはそう言っただぞ。納豆食わないとまでは言わないけれど、女の子にとって納豆がひとりごとでもらすほどの存在には思えない。え、それとも俺が納豆を侮り過ぎている？ ていうか「納豆」

と「豆腐」ってどう考えても漢字逆だと思うんだけど。ヤバイ。すごい関係ない。思考を戻さなくては。

俺の混乱した思考に追い討ちをかけるひとりごとが飛んだ。

「うわー、牛丼食べたーい！」

牛丼、だと？

目を見開いて驚愕していると女子生徒は小さな声で「食いたい食いたい」と唱えている。混乱する。激しく混乱する。

どういう状況なんだ？ どうなると女子が牛丼を食べたくなるんだ……。女の子はひとりごとではバフェ食えたいとかピンク大好きとかしか言わないはずだ。女子が牛丼を食べたい状況とは。

そうか。わかったぞ。

「は、腹が減ってるのか!？」

俺は混乱のあまり声を出してしまった。
その瞬間^{しゅんかん} 向こうの気配が息を呑んだのが感じられて、血の気がひいた。じわつと嫌な汗^{あせ}をかく。

なぜ、声を出した俺。しかし、話しかけてしまった以上、もうあと戻りはできない。

焦った俺はなんとか不審者^{ふしん}になるのを免れるため、優しさのこもった台詞^{せりふ}を追撃^{つげき}のように早口でひねりだした。

「おい、ば、パン食うか？」

「え、え？」

だいぶ混乱した声に向こう側から聞こえたが、俺も自分の発言に同じかそれ以上に混乱した。優しさを目指したはずが、だいぶトチ狂った感じになった。

俺は食べようと思っていた手の中の焼きそばパンを見つめ、ヤケクソ気味に本棚の向こう側に向かつて投げた。本棚は高く、みつしりと本が詰まっ^つまっ^まっていて天井^{てんじやう}近くまであるが、パンが通過するくらいの隙間^{すきま}はあった。

べし、とパンが床^{ゆか}に落ちる軽い音がした。

俺は、一体なにをやっているんだ。

これは、優しさ……なのか？

答えてくれ！ 菓子ちゃん。

菓子ちゃんは『そーしくん、最高にキモいよ』と教えてくれた。

さすが菓子ちゃん！ だよね！ 顔も見えないのに急にパン食べるかとか！ 優しさどころか事案発生だよ！ 自分の発言を省^{かえり}みてどっと汗が出た。

大体なんだよ。

「腹が減ってるのか？」

「パン食うか？」

これは完全にジャングルで未発見の変な生き物に遭遇^{さうぐう}した時のニンゲンの台詞だ。気が遠くなった。

向こう側からぶつと吹きだす声が聞こえた。

「焼きそばパン……」

それちゃんと市販のパンだから！ 陰毛^{いんもう}とか入ってないから！ 心の中で叫ぶ。

顔が見えない相手がパンの袋^{ふくろ}を開ける音がした。ソースの匂いがこちらにまでふわっと届いた。

「ありがと。タベル」

食べるのか。少しほっとした。

本棚の向こうの相手はどこか未開のモンスターっぽい返事をして、またくすくす笑った。そして、女子生徒は驚くべき返答を続けてきた。

「オマエ……いいヤツ……オデ、おマエ食ワナイ」

どこか低い、籠ったような作り声で言われてわかった。

未開の地のモンスターごっこが始まっている。

そんな遊びがあるかとはかく、そういうふざけた返答だった。

俺は感動に震えた。いいやつはお前だ。排便もろくにしないはずの女子でありながら、

俺の未開のモンスターごっこに乗ってくれるとは。

俺は断じて未開のモンスターごっこをしなかったわけではない。しかし、危ないやつにならなかったのは九死に一生を得るほどの奇跡だった。優しいモテる人にはなれなかったけれど、焼きそばパンを持ったひょうきんな人として不審者になるのは免れた。

言いようのない動揺で揺れてしまいガタガタツと音がした。音を立ててはいけない気がしてまた固まる。

俺はそのまま微動だにせず、なるべく音を出さずにハアハアしながら、女子生徒がパンを咀嚼してごくんと飲み込むごく小さな音にずっと耳を澄ましていた。控えめに言って変態度が高い。一刻も早くこの場を出ていきたかったけれど、女子生徒の前を通らないと扉

を出られない。動くに動けなかった。

やがて、空のビニールを畳むような音が聞こえた。完食したらしい。

女子生徒が「ふう」と小さな息をこぼして言う。

「ゴチソウサマ、ウマカッタ。次はオマエを食う」

「げほっゴホッ」

俺は激しくむせこんだ。

女子生徒が「ダイジョウブカニンゲン」と言って立ち上がった気配がして慌てて言う。

「待て、近づくな！俺は美味くないぞ！」

とつさに最悪の台詞をこぼした俺に女子生徒が小さく鼻息をふすん、ともらす音が聞こえた。またくすくす笑っている気配がする。

「ニンゲン、オマエ……名前、なんていう……ぶふ」

言いながらちよつと笑っている。

なんというか、この女子生徒、ノリノリだった。細かいことはさておいて、助かる。

「ニンゲン、ナマエ……くつくく」

「えっあつ、な、名前？えっと、さく……さく……さく？いやつ、俺はしがない名もないネクラ！ネクラやろうです！……あのつ、来るな！」

来るな、と叫ぶまでもなく、女子生徒は立ち上がったような気配はしたけれど、こちらに向かってくる様子はなかった。そのまま本棚越しに明るい声を出す。

「ネクラ……？　じゃあわたしは……さすらいの非リアで」

「えっ」

「うーん、あ、ヒリア！　ヒリアって呼んでよ！」

「ひ、ひりあ？　ちゃん」

どう考えても本名じゃないのに女の子の名前を呼ぶにあたり、声が裏返った。

女子生徒ヒリアはそんな裏返りも意に介さずに「うん！　あだなみたいじゃない？　あなはネクラ君！」と嬉しげに言ってまた楽しそうにくすくす笑った。

俺と謎の少女、ひりあちゃんはその場かぎりの謎のハンドルネームを用いて少しだけ話をした。

顔の見えない友達

◇ヒリア

「さいちゅーん！　こっちこっち！」

春休みに入ってわたしはつかの間の休息を楽しんでいた。

お休み大好き。今日は友達を訪ねて、かつて住んでいた街へと来ていた。

「マホ、りゅんりゅん！　ゴリアター！　みんな、久しぶりー！　あれ、ぼちよむさんは？」

「ぼちよ今日来れないって。さいちゅんに会いたがってたよー」

「そうかー残念。よろしく言っといて」

「さいちゅん相変わらず可愛いね！」

「本当に？　これでも？」

激しく変顔をしてみせるとみんな笑ってくれる。ああ、安らぐ。

「中身は相変わらずだねー。前友達できないとか言ってたけど、あのあとできた？」

「できなかった！」

「即答！」
そくとう

「なんでだろねー、さいちゅんはこんなに面白い子なのに」
おもしろ

「なんか敬語使われてる」

「そう言うみんなが「ああ……」と頷いた。
うなず

それから「さいちゅんいい子だから、そのうちできるよ」と口々に慰めを言ってくれる。
なぐさ

「ありがと。あ、でもこの間、見知らぬ男子と珍獣ごっこして遊んだよ」
ちんじゅう

「は？ 珍獣ごっこ？ なにそれ」

みんながきょとんとするので珍獣モードに入って低い声を出す。

「ニンゲンたち、元氣ソウダナ……オレ、オハナ、タバナイ」

「お、オオ……サイチュン……オマエ……オハナ、タバナイ……タベルニンゲン」

さすが友人達。即座に理解して珍獣で返してきた。しかし、みんなが未開の地のモンスタ―になったので、発見役の人間がいけないという事態になってしまった。

駅から一番近いゴリアテの家に行つて、買い込んだお菓子を開封して、話を再開させる。

「さいちゅん、そのモンスターハンターの人とは友達になれなかったの？ 相当仲良くないとな遊びできないと思うんだけど……」

「それが顔も名前も知らないんだよね」

「顔も名前も知らない相手にモンスター遊びふっかつたの？ さいちゅんそれどうなの」

「ふっかけてきたのは向こうだもん」

そう答えつつも、ちよつと考えた。

てつきりわたしとひとりとごとを聞かれて恥ずかしいところにギャグをふって流してくれたのかと思つていたけれど、冷静に思い返すと別にモンスター遊びをしかけられたわけでもない、という解釈もできる。
かいしゃく

そもそもわたしはあの時、ストレスがたまつていて、ふざけたくてしかたがなかった。だからそう思ってしまっただけかもしれない。でもそのあとちゃんと乗って返してくれた。もし違つてもいい人だ。
ちが

「名前はともかくなんで顔がわかんないのよ」

しつかり者のマホに言われて、みんなにそこまでの経緯を話す。
けいゐ

「なるほどー、そういうことか」

「その人、なんで話したのに、さいちゅんのほうに来なかったのかな」

「わかんない。でも、わたしも顔見られなかったからちようどよかった」

「なんで」

「顔見ると普通に話してくれない人多いんだもん……」

少なくとも気さくにモンスターごっこをしてもらえる顔じゃないことは自覚している。だからあの日も結局、挨拶して顔も合わせないままそそくさと先に第二図書室を出たのだ。

「うーん、そっかあ。さいちゅんはもう高校でそういうキャラなんだね……」

「残念ながら」

「その人あとで探した？」

「うちの学校クラス多いし、第二図書室で会ったから、他学年の可能性もあるし……多過ぎて。声しかわかんないのに、無理だよ」

しかも、わたしはアニメの声優が途中で替わってもまったく気づかず観ているタイプなので、声で絞るのはそもそも無理そうだ。声の出し方が似ていると皆同じに聞こえる。

「そっかあ……」

「あ、ねえ、さいちゅん共学どうなの？ 格好いいモテる人とかいる？」

わたし以外のみんなはずっと同じ学校でそう変化がない。幼稚園から一貫の女子校なのもあって、皆こちらの話を聞きたがる。

モテる人を聞かれて、佐倉総士がほんと浮かんた。

「なんかねえ、同じ学年にすごい貴公子みたいな人がいるよ」

「えーどんな人？」

「すごいモテて、いつも女の子に囲まれているんだけど、隙がなくて誰とも付き合ったり仲良くしたりしないの。すごいよ。なんかちょっと頷いたり返事しただけできやあとかわあとか騒がれてる」

みんなもわあきやあ言って食いついてきた。

「どんな顔？ 芸能人で言うど誰？」

「うーん……芸能人はわかんないけど……皆は天草四郎に似てて言ってたよ」

「天草四郎の顔見たことあんのかよ！」

「それは……ないと思うけど……イメージ？」

「さいちゅんもファンなの？」

「ぜんぜん。だってああいいう人は友達と一緒に見て騒ぐのが楽しいんだよ。わたし友達いないから……ファンにもなれないよ」

「友達がいないと男子にきやあきやあ言うこともできないか……哀れさいちゅん」

「わたし色々哀れだよー」

ひとしきり話したあと壁の時計を見たりゆんりゆんがわたしの顔を見たり言う。

「あ、もうお昼だね。そろそろ行く？ 牛丼」

「ぎゅうどん！ いいの？」

「そりゃさいちゅんが来るんだからみんなそのつもりだよ！」
 「初めて行った時のさいちゅんの号泣^{ごうきゅう}っぷりが忘れられないよ」
 「美味^{おい}しいって泣いてたもんね」

みんな笑ってそう言ってくれる。友達最高。牛井最高。

*

楽しく遊んだその日の帰り、わたしは行きと同じように電車に乗った。
 途中^{とちゅう}乗り換え^かがひとつあった。

改札を出て、普段は降りない駅で降りて、雑多な駅前のお店を見まわす。
 知らない街を探索^{たんさく}するのがわたしの趣味^{しゅみ}のひとつだ。

ドラッグストアがある。お団子屋さんも。あ、商店街もある。

ゆつくり見て歩きたい気持ちもあったけれど、今日はもう遅い。今度。今度絶対また来よう。未練^{みれん}がましくちらちら見ながら駅に向かう通路で、声が聞こえた。

「豆腐^{とうふ}できたて豆腐」

ぱぶー。ラッパの音もした。

見るとリヤカーをひいて豆腐を売っている人がいた。

うちの近所ではこんなあまり見ない。物珍^{ものめづらし}しさでジロジロ見つめる。

ん？

ほかむりみたいなのをしているけど、あの豆腐売りの人には見覚えがある。

あれは学校のアイドル、佐倉総士^{さくらそうし}じゃないのか？

見間^{みま}違い^{ちがひ}かと思って何度か見つめたけれど、やはり佐倉総士に見えた。佐倉総士にしか見えない。

「豆腐く美味しい豆腐」

ぱぶー。

しかし、どう考えてもありえないのでよく似た別人だと処理することにした。
 ない。佐倉総士が、豆腐はない。あの人^{ひと}はたぶんキャビアとかしか売らない。

◆ ネクラ

短い春休みが明けて、俺は高校二年生になった。

鮮^{あざ}やかな桜はすぐに散ってしまい、すぐにいつも通りの緑色の日常が始まった。

しかし、生活はほんの少しだけ新しい。

めばしい変化のひとつとして、クラス替^かえがあった。うちの学校では二年から学力別に

振り分けられる。もともとギリギリの学力で入った荻坂とはやはり別のクラスになった。
新しいクラスには、氷の姫^{ひめ}、西園寺^{さいおんじ}ゆりあがいた。

相変わらず神々しいオーラを放っている。人間の中に妖精^{ようせい}が紛れ込んでいるかのような美しさに、周りの男達が話しかけるでもなくうつとりと眺めていた。女子も時々チラ見して、はあ、とため息を吐いている。すごいなと感心する。

新しいクラスの雰囲気は、悪くなかった。

騒がしすぎず、大人しすぎず、明るい感じがする。

男子生徒が数人、さっそく輪になってゲラゲラ笑っていた。楽しそう。

そちらをぼんやり見たまま移動しようとする。肩をどんと誰かにぶつけてしまい、見るというのまにか移動していた西園寺さんだった。

動揺してしまい、言葉を出せずにいると、彼女が小さな声を出す。

「ごめんなさい」

うわ、しゃべった！ 動いた！ 生きてる！

俺は酸素が薄くなり、やつとのことで、気にするな、というように黙って首を横に振ることしかできなかった。

別に怒ってはいなかったし、不快な顔をされたわけでもないけれど、近寄りたさがす

ごい。なるべく関わらずに生きていこうと心に決めた。なんか、住んでる世界が違う。

それなのに、複数ある委員会の担当決めで俺は彼女と共に学級委員に選ばれてしまった。なぜ。

学級委員で、もっと人望があつて人をまとめられる人がいいんじゃないのか。俺がそんなものができるものだろうかと思悩んだ。

先生の前に並んだ時西園寺さんが「よろしく」と言ってくれたので、なんとか小さくカクンと頷いた。変な人形みたいな動きになつていないか心配だ。

それでなくても女子は苦手なのに、この人を前にすると言葉がまったく出なくなる。ほかの女子でも目は合わせられないけれど、目どころか姿そのものにピンと合わせられない。いっそ恐怖を感じる。

「よし、よし。決まりだな。お前らあとで職員室に來い」

担任は毛深いずんぐりゴリラ系の増田先生。どこかすました先生が多いこの学校では心のオアシスだった。

「はい」と答えると少し後ろから「はい」と西園寺さんの返事が聞こえた。

休み時間に言われた通り職員室に向かう。西園寺さんと一緒に行くのが自然なのかわからなくて、誘うこともできず、教室を出た彼女の少し後ろを隠密のように静かにヒタヒタ

と追う。変質者の気持ちでいっぱいだった。

骨格なのかなんなのか、後ろ姿がすでに可愛い。なにあれば本当怖い。

「おう、ふたりとも来たなー」

増田先生がニカッと笑って俺を見たので西園寺さんがつられて俺のほうに振り向いた。

視線どころか意識を遠くに飛ばしてしのご。

先生からいくつかの仕事の説明があつて、それに受け答えをした。毛深くて汚らしい男の先生とは緊張せずに話せる。すごく普通に会話できる。

学級委員と聞いて萎縮してしまっていたが、大した仕事はなかった。

体育祭や文化祭、修学旅行などの決め事はほかに委員があるのでやらなくていい。

メインの仕事は朝の挨拶の号令。集会時の人数確認。それからたまにある学級委員の集会への出席。それ以外はだいたい雑用というか、先生の小間使いポジションに思えた。これなら俺にもできそうだ。

ほかになにか質問はあるかと聞かれ、俺の背後にいた西園寺さんが「あの」と口を開く。

「なんでわたし……選ばれたんでしょう」

増田先生はガハハと笑ってなぜか彼女ではなく俺の肩を軽くバンバン叩いた。

「お前らはクラスの顔に選ばれたんだよ。深く考えずにがんばれ」

西園寺さんがちらりと俺を見たけれど、硬直してしまい、首が、表情筋が動かなかつた。

「あ、ついでにこれ。さっき配り忘れてたんだよ。頼んだ。これを頼むためにわざわざこ

こで説明したんだよーん」

「はあ」

先生から渡された小さめサイズの教材を持って職員室を出た。

西園寺さんが俺のほうを見て言う。

「あの……持つ？」

「いや……」

心の中は「いや……」じゃなく「いやーん」だった。俺のことは道に落ちている軍手ぐらいの扱いで、どうか、いないものとして扱ってほしい。脂汗出そう。

教室に入ると西園寺さんが今度は「配る？」と聞いてくる。

手を伸ばされたけれど、手のひらで制した。

こんなしょうもない仕事、この方にさせられない。

「え、でも」

「いや、いいよ」

手早く仕事をすませ、彼女に軽く会釈して教室を出た。目指すは廊下の一番端のクラス。

ぼんやりしていると女子に話しかけられてしまうので急ぎ足でそちらに向かった。
教室を覗くと藪坂が男子数人とゲラゲラ笑っていた。あいつ、もう新しいクラスにうち
とけてやがる。こちらを見たので片手をあげて呼び出した。

廊下の端に移動して小声でしゃべる。

「おー総士。春休みどうしてた？」

「ずっとバイト」

「今はなんのバイト？」

「親父の知り合いのツテで、リヤカーで豆腐売ってた」

「お前……知ったやつに見つかっただろうすんだ」

「ほっかむりしてたから大丈夫。それより聞いてくれ、西園寺さんと、学級委員になった」

「ゆりあさんと……」

「バカ藪坂！ 下の名前など出すな！ やめろやめろ畏れ多い！ あのお方が近くにいたらどうする！」

「いないよ。お前はどこの時代劇だよ」

「ひかえおろーう」

ふざけて言うと言い目で見られた。

「総士、お前のほうこそ、周りに聞こえるぞ」

ぱつとキョロキョロあたりを見まわした。近くに人はいない。

少し遠くにいるが自分達の話に夢中だった。ほっと胸をなでおろす。

「で、どう？」

「すごいな。近くで見るとヤバイな。あの可愛さ。人知を超えているな」

「なんか話した？」

「ははッ。話せるわけじゃないか、この俺が。俺、至近距離で西園寺さんの吐いた二酸化炭素吸ったぞ。すごいだろ」

藪坂が「はあ」と呆れたようなため息を吐いた。

「お前……せっかくのチャンスなのになにやってんだよ」

「チャンス？ なんの？ 四十八人目の彼氏になる？ 言っとくが絶対無理だぞ」

「まあ……無理だろうな。あ、彼氏は最新情報だと四十九人だ。だからなれるとしても五十番台だ」

「増えたのか……」

「上の学年に我こそが彼氏だと言ってるやつがふたりいるらしいが、実際に彼女と話してるところを見た人は誰もいない……」

「そこはかとなく都市伝説みたいだな……」

「ゆりあさんは無理として……お前そろそろ彼女つくれよ」

「無理。ていうかなんでお前にそんなことを言われなきゃならないんだよ」

「噂うわさになってるからだよ！」

「は？ 誰と誰が？」

「オレとお前が!! お前が女子にまんべんなくガードが堅かたく、男友達もそういないのにオレとだけやたらと話すからだよ！」

「はッ、馬鹿ばかなことを……」

「馬鹿でもなんでも！ オレはいい迷惑めいわくなんだよ！ このままだとオレとお前の薄い本がでかかねない！ 彼女つくるまで会いにくんな！」

「いや、そんな！ ご無体な！」

「うっせえ！ とりあえず話しかけんな！」

「わかった。また来る」

「来んなつての！」

藝坂に拒絶ききぜつされてしまった。

こうなると学校には友達ともだちがいらない。

そうでなくても人見知りで、仲良くなるには時間がかかるタイプなのに、ほかの男子と友人になる隙すきはなかなかない。

困った。

俺はただ、適当にふざけた話をこっさりしてくれる人間がひとり欲しいだけなのに。

◇ヒリア

新学期になってから、わたしは久しぶりに第二図書室に来了。

もしかして二年生になったらこの場所を使わなくてもいいのではという淡あわい期待はあつけなく砕くだけ散った。結局一年の時となにも変わらなかった。友達欲ともだちほししい。

本棚ほんだなの奥に行つてネクラ君がいなか確認したけれど、誰もいなかった。

そのまま奥のスペースにしゃがみこみ、カビたような紙の匂においを嗅かいではあとため息を吐はいた。

学級委員にまでされた。人望ひとぞろないのに。

本の背表紙を無意味に指でトイトイ触さわっていると、ばん、と扉しりぞの音が聞こえた。はあ、と小さなため息が聞こえて男子生徒だとわかる。もしかして、と思つてぱつと顔をあげる。

「ネクラ君!」

「えっ」

「ネクラ君？ わたし！ ヒリアだよ！」

勢い込んで話しかけたけれどもしかして人違いだらうか。

不安になっているとすぐに「ひっ」と聞こえて数秒後「久しぶり」と小さな声がした。ネクラ君は久しぶりに会えてもやっぱりこちらに来ようとはせず、わたしのいる本棚の反対側でそのまま座り込む気配がした。

相変わらず姿を見せようとしない。でも、わたしもそのほうが話しやすい。

「あのだ、モンスターごっこなんだけど……あれ、モンスターごっこでよかった？」

勇気を出して確認すると長い長い沈黙のあと、そんなつもりはなかったとの回答が得られた。う、うわあ。わたしって……わたしって……。

「ごめんなさい……ひょうきんな人だと思って……つい」

「いや、そう思ってもらえてよかったよ」

「すいません。楽しかった」

そう言うと思うてもらえてよかったよ。

「今日はニンゲンでいいの？」

ネクラ君がそう言ってくれたので笑いながら「今日はね、人間バージョン」と答える。

ふざけて話すのも楽しいけれど、普通に話もしたい。

「わたし、友達いなくて……新しいクラスでもできなさそうなんだ」

「えっ、そうなの？」

意外だといわんばかりのリアクションが返ってきた。

「友達いたら、休み時間にこんなとこいいないよ」

「それもそうか……い、いや、実は俺も……友達いなくて」

「ネクラ君も？ そうなんだ！」

めでたいことではぜんぜんないのに仲間意識で喜んでしまった。

「ひりあちゃん明るいいし、すぐできそうだけどな……」

「わたし、人見知りすごくて……」

「俺とは最初から話せたじゃない」

「それは……ネクラ君が話しやすかったから……」

スタート時点から振り切ってふざけてしまったので、人見知りする間もなかった。

あとはお互い顔が見えなかったのもよかったのかもしれない。

それに、普通に話しても彼の優しい話し方はわたしも緊張しないでおしゃべりできる。

「ネクラ君、すごいいい人なのね……」

「い、いや俺は……生ゴミだから……話も下手だし……」

「そんなことないよ!」

可哀想に友達がいけないことですっかり卑屈ひくつになってるに違いない。気持ちわかる。どうせ顔も見えないし、名前も知られてない。気も合いそうだし、人に言えない話も彼になら言えそう。

「なんか、目立つ人と同じ委員会になっちゃって……わたし、嫌いやがられてる気がするんだ」

「委員会って、なんの……いや、いい。そうなんだ。ひりあちゃん話しやすそうなのに」

「被害妄想ひがいもうそうかもだけど、ぜんぜん目も合わせてもらえないし、会話してもらえない」

「それはひどいやつだな!」

「やつぱりそう思う? 気のせいかなって思ったりもしたんだけど、普通そんな対応しないよね……」

「そんな対応するやつはクズだ! 性格が悪い!」

「あのね、その人……なんでもない」

佐倉総士は割と有名だ。名前を出そうかと思ったけれど、学年もクラスも伝えていないのによそうと思いとどまる。流れでわたしの素性すじようが知れてしまうようなことは避けたい。

名前や顔を知られてもいいことがある気がしない。

女子ならともかく、ネクラ君は男子だ。

わたしはモテない容姿ではないけれど、入学してからこの方変なのにし好かれてない。反面マトモな人には敬語を使われて避けられている。

ネクラ君のようなマトモな人には忌避きひされるかもしれない。

わざわざ自分から素性を明かすことはない。

嘘うそをつけるとは思わないけれど、せめて、もうちょっと触ふれないでいよう。

「……ひりあちゃん、聞いてもいい?」

「えっ、なっ、なにを?」

やはり、素性に関わるのことかと身構みくまえていると、本棚越びしにたっぷり考え込むような間のあと、ネクラ君は言った。

「こんな機会そうないから……勇気出して聞くけど」

「う、うん」

「……も、モテる男って、どんなのだと思う?」

「……………ひえ?」

「い、いやなんでもない! なんでもない!」

「ネクラ君、モテたいの?」

友達もいないのに？　まず先に友達じゃないの？　という台詞は飲み込んだ。優先順位は人の勝手だ。

「い、いや、モテたいとかってわけでもないんだけど……俺、普段女子とちゃんと話さないから……参考までに聞いてみたい」

やつぱりモテたいんじゃないのか。

いや、高校生男子、モテたいよな。モテたくないはずがないよな。

なんだか可愛いな。ネクラ君。

思わずふすと笑ってしまいが向こうの反応がないのでひっこめる。

いけない。モテる男について、真面目に考えてあげなければ。

モテる男。と考えて同じクラスの佐倉総士がぱっと浮かんだ。しかし、背が高く顔とスタイルがよくて成績優秀、運動もできる、謎の色気と雰囲気もある、というあれは、とても一般に参考のできる物件ではなさそう。

しかし、ほかにサンプルを知らなかった。

「うちのクラスのモテる人はねえ……なんか顔がよくて……」

「あつ、見た目じゃなくて、内面の話なんだ。見た目はしょうがないから……」

「あ、そ、そうだよな！　ごめん！」

酷いことを言ってしまったかもしれない。ネクラ君の顔は知らないけれど、自信があったら隠れてなんていないだろう。思いやりのない発言だったと反省した。

「えっと、モテる人……モテる人……あ……えっとわたし、中学までずっと女子校で……その……」

「あ、あうあ。あまり難しく考えなくて……」

わたしの好みはあまり一般的じゃない自覚がある。ここは一般的な回答をすべきかも。

「えーっと……優しい人？」

「……や、やつぱり!!」

「わ、わかんないけど……一般的には？　そうなのかなって？」

「そ……そうなんだ？」

なにか、双方に自信がなく、あまり実りを感じなかった。広がりもなければ、発見もない。まるで役に立たない発言をした感覚がある。でも、わからないのだから仕方ない。

わたしモテる男じゃないし。今度お父さんあたりに聞いてみようかな。

でも、とりあえず、ネクラ君はいい人だ。励ましてあげなくては。

「ネクラ君、元氣出して。ネクラ君ならきつとよさをわかってくれる人いるからさ！」
現にわたし、佐倉総士とネクラ君なら、迷わずネクラ君を選ぶ。

そんなこと言うとか変な感じになりそうだから言えないけれど。

「わたし、本当にネクラ君には友達も彼女もすぐできると思うよ！」

「は……それは無理だけど……でも、ありがとう」

苦笑しながらの声に温かさを感じた。

「あ、でもほら！ わたし達、友達だし！ ほらもう友達できたー！ はははっ……」

「……」

あ、調子乗りすぎたかな。いくらなんでも顔も見せずに名前も名乗らずに友達はないよね。ないよね……。ね。

「……」

沈黙が返されて変な汗^{あせ}が出てきた。「なんてね！」とかつけたほうがいいかな。煩悶^{はんもん}していると向こう側でひふーと息の音が聞こえた。

「……いいの!？」

「えっ」

「え、と、友達、いいの？ だってほら俺、その、こんなアレで、モテないクソ野郎^{やろう}だし顔も出せないアレなのに……ひりあちゃん友達になってくれるの!？」

「も、もちろんだよ！ そんなそんな、顔とか名前なんてにんげんの本質にはなんの関係

もないよ！ わたし、ネクラ君と話しててすっごく楽しいし！」

「……」

またネクラ君^{だま}が黙った。

自分がおかしなことがかり言ってる気がしてドキドキする。

やがて、さらに長い沈黙のあと、彼が鼻声で「ありがとう」と言っただけは友達にならなかった。

◆ネクラ

ひりあちゃん、すごくいい子。

話していると癒^いされる。友達がいらないから、こんなつまらない男を友達にしてくれる、可哀想な子。あんなにいい子なのに。

俺だけじゃなく、向こうも姿を見せたがっていない気がする。姿を見せようとしなければ容姿にコンプレックスがあるからかもしれない。あんないい子、たとえどんなバケモノ級のブスだったとしても抱^だきしめて可愛いよと言っただけでなくなる。

どんな人間でも性別が女である限りそんなことは本当にはできそうにないけど。ほのかに胸が高鳴るのを感じて慌^{あわ}てて打ち消す。

せつかく友達になつてもらえたのに、余計な感情を持ち込んだら嫌われてしまうだろう。朝のホームルーム終わりに増田先生が言う。

「放課後、校長室の掃除を手伝ってくれるやつ、いるかー？」
誰も手は挙げなかった。

増田先生はよく言えば親しみやすい先生であつたが、教師の中では断トツにだらしく、毛深くて、人使いが荒かつた。職員室のポットの洗浄だとか、自分の机周りの片付けとか、平気で手伝いを頼んでくる。

しかも手伝えと言われて行くところ先生はなにもしていないことも多い。というか、それしかない。最近はみんなわかっているので寒々しい目をいつせいに向けていた。

だが、そんなことでたじろぐ先生じゃない。これだけ毛深いんだから心臓にもワサワサ生えていてもおかしくない。

「じゃあ今日は七日だからー……ふひひつ、近藤……は部活あるな……佐倉！ 西園寺！ おつ、ちょうど学級委員だな！ ふたりに頼む」

なぜそうなつた。

西園寺さんが一瞬だけこちらを見て、ほんのわずか眉根を寄せるのが見えてドキツとした。気のせいかな、嫌そう。いや、俺だつて掃除は嫌だけど。

放課後、俺と西園寺さんは揃つて校長室にいた。

校長は小柄で温和そうなおじいちゃんだ。ちよつとフガフガしている。

俺と西園寺さんを見てニコニコしながら言う。

「わりゆいねえ。いやね、この額の縁のホコリとか、見たら、急にしゅごい気になつちよつて！ あとあのあの、棚の上ね！ ホコリまみれでええ。終わつたらお菓子あげるからにえ！」

どうも普段の掃除では触れないような細かいところが急に気になつちやつたらしい。

増田先生は「終わつたら知らせてくれ」と言つてサツと出ていく。逃げ足が早い。

校長は最初、校長椅子に座つてニコニコ見ていたけれど、少し埃が散ると「窓、あけりゆね」と言つて大きく窓を開けてどこかへ避難した。

振り返ると西園寺さんがハタキを持つていた。盾やトロフィーのようなものにバタバタとハタキをあてているが、ホコリが舞うばかりであまり落ちてない。

「あの……」

声をかけると不機嫌そうに睨まれる。え、俺なんかしたか。

「えつと、一度全部上の物をどけて、拭いて……棚も拭いて戻したほうが早くないかな」

西園寺さんは目をぱちぱちさせて、棚と俺を見た。

それから無言で棚の物を床におろし始めた。返事なし。なんか嫌われている気がする。

しばらく無言で掃除していると、騒々しい音と共に扉から人が入ってきた。

「やあ！ 総士君！」

「薮坂かよ。なにしに来た」

こいつ俺にはしばらく会いにくるなと言っただけだったか。

「お掃除を、見に！」

薮坂は語尾にハートマークでもついてそうな邪惡な声で言っただけでウフフと笑い西園寺さんをジロジロ見る。

「来たなら手伝ってくれよ」

「お掃除を、見に」

今度は「見に」を強調するように力強く言う。

「なんかキモい。帰れ」

「なんだよ総士君、友達じゃないかよ！」

西園寺さんがちらりとこちらを見た。

「あ、あ、ボク、佐倉君のお友達の薮坂透っていいいます」

薮坂の張り切った挨拶に、西園寺さんは抑揚なく「はあ」と答えた。

薮坂……身の程知らずにもほどがあるぞ。しかし果敢だ。無謀とも言える。

しかし、結局薮坂はそれ以上彼女に話しかけたりはしなかった。できなかったとも言える。思ったよりヘタレだった。彼女のほうも、それでなくても話しかけづらい雰囲気なのに、今日は特に不機嫌な感じで、人を寄せ付けなかった。よほどの猛者でないとここには切り込めなそうさ。

薮坂はしばらくウロウロしていたけれど、やがて「失礼しました」と言っただけでスグスグ帰っていった。見事な撃沈ぶりだった。

なんとか掃除を終わらせた頃、校長が戻ってきて額縁や棚の上を小姑のようにチエックして笑顔で「うんぬ！」と頷く。少し遅れて増田先生が紙コップとペットボトルのお茶を手に「おつかれさん」と戻ってきた。

先生がふたりいたので、西園寺さんは少しためらうような仕草のあと、応接セットのソファの俺の隣に腰掛けた。かなりスペースをあけていた。彼女は結局、掃除中もひとこと口をきこうとしなかった。嫌なんだろうな……俺が。

なんでかわからないけれど俺は西園寺さんに、確実に嫌われている。

追加でまた睨まれた。おお……これ以上は離れて座れないというのに。

校長が約束通りお茶菓子の箱を出してきたのでそれを開封した。

お菓子は饅頭だった。

西園寺さんは普段ケーキしか食べないって菓子ちゃんが言っていたけれど、こんな野暮ったい和菓子など食うんだろうかと思っていると、小さな口に菓子が入っていくのが見えた。「美味しい……」

西園寺さんが少しだけその表情を柔らかく崩して呟く。その声にわずかな既視感を覚える。既視感というか、聞き覚えだけだ。ほんわかしした気持ちになるその声は、当然のように可愛かったので、芸能人の誰かにでも似ているのかもしれない。

ちらりと見ると、西園寺さんの口の端に、饅頭の餡のかけらがついてた。

壮絶に不似合いな装飾に、教えてあげたいと思うけれど、なかなか勇気が出ない。

「ゆりあちゃん、口元、ちゅいてるよ」

馴れ馴れしく下の名前を呼びそれを指摘したのは校長だった。

彼女が照れたようにほんの少し笑って口元を指先で拭った。

その顔が恐ろしいまでに無邪気で、可愛過ぎて、目を見開いて凝視してしまう。

西園寺さんが「水の姫」と呼ばれている理由のひとつに、彼女は笑わないという伝説が

あった。笑っているところを見たやつはいないとかなんとか。この人、この程度のことです笑うのか。校長すごい。もしかしてものすごいモテる人かもしれない。

驚愕と共に見惚れていると視線に気づいた彼女が怒ったように睨んできて、俺はまた視線と意識をあらぬほうに飛ばした。

俺は小さい頃に行った海で見た、カニのことを考え続けた。

◇ヒリア

ネクラ君に、また会いたい。

暇を見つけてたまに第二図書室に行っていたけれど、彼はいなかった。

わたしのほうも先生の用事、次の授業の準備などで毎時間は行けない。

この間は近くの廊下に佐倉総士がウロウロしていたので入れなかった。

口惜しい。休み時間ごとに、今いるかもしれないのに、と考えて過ごしていた。

通りすがりの教室の中を覗き込みながら、ひとりで座っている男子を眺め、あの子かも、と想像をめぐらす。だけどすぐに友達が話しかけたりしていて違ふとわかる。

別学年だろうか。去年いたのだから一年生のはずはない。同じ学年か、三年生。探してみようかな。

こちらの姿は見られずに、確認したいなんて、ちょっとずるい気もする。だけどやつぱり、見られるのは怖い。向こうのことは気になる。

しかしわたしはクラスメイトの顔と名前すらきちんと全員覚えていたのか怪しい。

関わりがないからなかなか覚ええないのだ。どうあっても見つけられる気はしなかった。第二図書室から戻ってくると、教室近くの廊下でいつも通り佐倉君が女子に囲まれていた。今日はまた一段と輪がでかい。

ここを通り過ぎないとクラスに戻れない。

佐倉君は相変わらず女子に囲まれても平然と対応している。

見てると「うん」とか「そうだね」とかあたりさわりのない返答しかしていない。なにか聞かれてもそのほとんどを冷静な瞳で撥ね除けている。それでもわたしに対する時よりは普通に受け答えしているように見えるのでやつぱりわたしのことは嫌いだらう。

これだけ女の子にモテるのに、男の仲良しもいるみたいだった。色々な物を持ち合わせている彼がなんだか憎らしくもなる。

目の前を早足で通り過ぎようとした時、教室の後ろの扉からボールのようなものがまっすぐわたしの顔に向かってびゅんと飛んできた。

突然のことに反射神経が追いつかず、ぎゅつと目をつぶる。

ボールはいつまで経ってもわたしの顔面にはこなかった。

固くつぶっていた目を開けると、佐倉君の息を呑むような端整な顔が目の前にあった。

視線を逸らすとそこに手があつて小さなゴムボールをキャッチしている。

話しながら、飛んできたボールからわたしを守った彼に周りがきやあとかほうとか大興奮の悲鳴をあげた。

教室の中から男子生徒が慌てた様子で出てきた。

佐倉君の周りにいた女子のひとり、山崎さんがその人に向かって言う。

「高山！ 教室でボール遊びしないでよ！ 西園寺さんの顔にあたるとこだったんだよ！」

「っ、さっ、西園寺さんのお顔にいいー!? ヒエヒエエエ！ 大丈夫でありましたでございましょうか!？」

真つ青になった高山君に大げさにペコペコと謝られる。

「まあ、佐倉君がとってくれたからね！」

女子生徒が皆で「ねー」「かつこよかったよねー」とまたきやあきやあ騒ぎだす。

高山君は佐倉君からボールを受け取ってあからさまに胸をなでおろした。

わたしは場の空気についていけず、そそくさと自分の机に戻った。

席に座って気づく。よく考えたら一応助けてもらったのにお礼も言っていない。

でもあの集団の中に戻る勇氣はなかった。佐倉君とお近づきになりたいのでは、とか誤解されたら嫌だし。でもそれってどうなんだろう。佐倉君が取ってくれなかったら顔面直撃だつたのに。もやもやと考える。

放課後、急いで第二図書室に行つてしばらくぼんやりとしていた。ネクラ君はやっぱ来ていなかった。忙しいのかな。

もう今日は来なそう。五分ほど待つて扉を出た。帰ろう。

教室に戻る途中、どこか急ぎ足の佐倉君が正面から来た。

休み時間のことを思い出して声をかけようか迷う。結局お礼を言つてなかったから。

ずいぶん急いでいるようだから、今度にしたほうがいいかな。いやでも、日が経つとなんの話だかわからなくなる。

そうこうしているうちにすれ違いそうになる。

まだ決心がつかないまま、とつさに腕をつかんでしまった。

「……っ、なに」

佐倉君は相変わらず美しいが無愛想な顔で、わたしの目は見ないけれど、立ち止まつて返事はしてくれた。

「あの……」

おそらく急いでいるんだから、さっさとすまそう。それでなくてもこの人わたしのことさつと苦手なんだから。時間をとらせちゃまずい。

そう思うのに、なかなか言葉が出ない。うつむいて無駄にモジモジしてしまう。

顔を上げるとぼんやりこちらを見ていた佐倉君と、初めて目が合った。

びつくりして息を呑んで小さく飛びのくと、向こうも小さく目を見開いて、同じくらい小さく背後に避けた。

は、と息を吐く。なんか廊下、暑い。

「今日、ありがとう」

ほんの小さな声だつたけれど、なんとか言えた。

そのまま急ぎ足で逃げるように昇降口に向かう。緊張した。

やつぱあの人苦手。でも言えた！ わたしは足取り軽く校舎を出た。

ネクラ君に会いたかつたな。結局今日も会えなかった。

会えていないといつてもまだ二日くらいだったけれど、せつかく友達になったのに、やはりこの状況は不自由すぎる。なんとかしなければ。

なにか、もっと会うための方法を考えなければ。

◆ ネクラ

第二図書室にぜんぜん行けてない。

たまに今だ、と出ようとすると女の子に話しかけられたりして、俺はウンウンソウダネマシーンとなつて頷いていた。

ひりあちゃんに、会いたい。くだらない話をしたい。モンスターごっこもしたい。その日も休み時間のチャイムと共に女の子に囲まれて、でくのぼうをやっていた。

「佐倉君、増田先生が呼んでたよ」

ぱつと顔をあげる。やった。持つべきものは毛深い担任だ。解放されて急いで職員室へ行くと、先生が自分の頭頂部をこちらに向けて指を指した。ため息混じりにこぼす。

「なあ、ここ、見てくれよ」

「はい」

「な？」

「なにがですか」

「白髪！ 前はこんなになかったんだよ！ なあ、どうしたらいいと思う？ おまえんちの父ちゃんどうだ？」

白髪は、抜くか染めろと言つて職員室を出た。なんなんだあの担任は。毛深すぎるし自由すぎる。

はつとなる。まだ時間はある。第二図書室だ。

教室からは割と離れているそこに走っていつて扉を開けてそつとしめる。いるだろうか。

はたして「ネクラ君？」という小さな声が奥から聞こえた。

「久しぶりだね」

言つてから、いや、三日くらいしか経っていないのにおかしかったろうか、と思つていると向こうから「久しぶりだよ！」と元氣よく聞こえてきた。声を聞くとホンワカする。

「わー、なんか、にやにやしちゃう！ 久しぶり久しぶりー！」

そんなことを言われて俺のほうがよく頬の筋肉を弛緩させている自信がある。

「ネクラ君は、やっぱりクラスで友達できない？」

「うーん、できないどころか、女子のひとりに嫌われたりして……」

「え、なにそれ！」

「隣に座るのを嫌がられたり……」

校長室で西園寺さんに避けられたことをほわんと思ひ出して言う。

一体自分がなにをしたのかわからないけれど、ああいう天上人にはきつと俺のヤバヤバしい内面がわかってしまうのかもしれない。なにもかも見透かされてそんな瞳が怖い。本当に、こんな俺と普通に話してくれるのも、こんな俺が普通に話せるのも、ひりあちゃんだけだ。

「え、隣の席の子に？ それはほんとひどいね……」

隣の席の、ではなかったが、特に訂正しなかった。説明しようとする細かな話になる。

「でも、それまではそんなことなかったから、俺がなにかしたのかも」

「そんなことないよ！ それは相手が性悪女なんだよ」

一生懸命な口調に、色々思い返して苦笑いしてしまう。

「別にいじめられて避けられるとかじゃないんだけど、やっぱり女子は苦手……はは」「そっかあ」

「あ、ひりあちゃんは話しやすいし、苦手とかじゃないよ！」

どんどん話しやすくなっている。

しかし、話しやすいのは顔を合わせていないのもある。名前を知られてないのもいい。俺だと思われていないから自意識が気楽だ。この時点で俺は顔を合わせ名乗る気はまだゼロだった。そのくせもつと会いたいと思っている。

「……わたしが同じクラスだったらよかったのにね」

なんて嬉しいことを言うんだこの子は。胸がきゅんきゅんする。

「そうだね。そしたら楽しいね」

そう言うとは本棚の向こうでうふふと嬉しげな声で笑う。そして笑っているうちに面白くなったのか、さらにくすくす笑う。かなりの笑い上戸。ひりあちゃんほんと可愛い。好きになりそう。ならないようにがんばるけど、今にもなりそう。俺、キモい。

「あのさ、ネクラ君」

ひとしきり笑ったあと、妙にかしこまった口調で彼女が言う。

「これ、なんだけど」

本棚の上から丸めたメモ用紙が投げ込まれた。

ぱしんと片手でキャッチして開くと、謎の、あまり可愛くない、リアルなゴリラが親指を立ててる写真がプリントされたメモに、手書きのアルファベットが並んでいた。

「あの……わたしの……連絡先」

「え、ええっ！」

「いやあの、メール、メールだけ！ なかなか会えないし、タイピングによっては鉢合わせたりするかもだし……どちらかが奥に入った時に、話したい時に、いるよってだけ言え

たら色々危険も減るかなって」

見ると naitodaisuki.gyudon@love@……と確かにメールアドレスだった。

名前もわからない。納豆と牛丼が大好きなことしかわからない。

「な、なるほど！」

見えないのに深く頷いた。というか、顔も見せたくないし、名前も名乗りたくないという互いの意思をなんとなく汲んだ上で安全のために連絡先を交換しようとしてくれている。なんて優しいんだ。優しいし可愛いし天才すぎる。

幸い俺のアドレスも、nanahage0923だから名前はわからない。

誕生日が入っているけれど、そんなものではまずわからないだろう。あまり詳しくはなけれど、他のメッセージアプリと比べても匿名性が高い気もする。

ポケットからスマホを出した。アドレスをうちこみ空で送る。

女の子と、連絡先を交換するなんて初めてだ。ドキドキする……。

「あ、きたよ」

「うん」

「なんでなまはげ……？」

「い、意味はない……」

ぶつとふさだす声が聞こえた。続いてくすくす笑う可愛い声も。

ひりあちゃんは俺の寒々しい言動をいつも笑ってくれる。可愛い声で笑ってくれる。

俺はそれだけで幸せな気持ちになる。

「ネクラ君は、休みの日はなにしてるの？」

「俺はだいたいバイトしてるかな」

「アルバイト？」

「うちの学校比較的裕福なやつ多いけど、俺は親に無理言ってここ来たから、学費の足しにしてみらうためにバイトしてる」

「へええ。えらいね」

「えらくはないよ。俺のうちの近くはちよつとガラの悪い学校が多くて……家からなんとか通える距離でちょうどいい学力のところ探したらここになった」

「そしたら、休みぜんぜんないの？」

「いや、バイトは長い休みの時メインだから、普段はもちろんあるよ」

休みの話なんてするからついそう言ってしまった。

暇ですよアピール。ひりあちゃんと遊びにいたら楽しいだろうなあ。

なんとかして顔も名前も知られずに一緒に遊べないものか。

までよ。ふたりとも忍者のコスプレして会えば……。

ひりあちゃんの声でくだらぬ思考から引き戻される。

「あのね、学校が楽しくなくても、休みの日とかに冒険すると結構気晴らしになるよ」

「冒険で、なにをするの？」

「わたし春休みにね、いつもと違う駅で降りただけで、色々あって楽しかった」

「え、どこ」

聞くと馴染みの駅だった。

「そこ俺の家の……」

そこまで言ったところで予鈴が鳴った。休み時間は話するには、あまりに短い。

俺は帰ったらひりあちゃん直筆のアドレスメモを眺めてニヤニヤするはてしなくキモい予定を脳内で決めて、挨拶をして先にそこを出た。

廊下を歩いている時に気づく。

もうこれは色々手遅れだ。

完全に好きになってしまっている。

メールができるようになりました

◇ヒリア

ネクラ君と連絡先を交換したけれど、それでもあまり会えなかった。

話し合いの結果、会う時は何分か時間をズラして入ることにしたので、その時点で通常の休み時間はまず使えなくなった。短すぎる。

そうなると会えるのは、お昼休みか放課後だけ。

休み時間にこっそりメールすると、来られない時はすぐには返事がないか『ごめん、行けそうにない』と返ってくるので無駄がなくなった。

無駄はないが、意外とタイピングが合わない。わたしは一年の時に結構第二図書室に行っていたけれど、三月のあの時期まで彼と鉢合わせことはなかったから、彼のほうはそこまで頻繁には来ていなかったのだろう。

せっかく友達になれたのに。

友達なのに。寂しい。

それでも簡素な連絡だけでもとれて嬉しいのだから、わたしもだいぶおめでたい。夜に自室で寝転がってりゅんりゅんとスマホの画面でぼちぼちと会話する。

例の男子とメールを交換したと言うと、興奮したような反応が返ってきて、その後電話がかかってきた。

「さいちゅん、ついに顔見たの？　どんな人だった？」

「いやあ、顔は合わせてないんだけど……」

「顔も合わせずにメールだけ交換したの？」

「むしろ、顔合わせずに簡単に交換できるからメールにしたんだよ」

「今時メールねえ……せめてLINEにすればいいのに。どんな話してるの？」

「え、待ち合わせに使ってるだけだよ」

「なんでー！　なんか送りなよ！」

「そ、そういう用途では……使うつもりじゃなかったから……よくないんじゃない？」

「なんで……友達なんでしょ？　ふつうふつう！」

「う、うん……」

「じゃあ送りなよ！」

「お、送ってみる！」

メール、意味のないメール、送ってみよう。

わたしは普段からメールの類には絵文字顔文字スタンプあらゆる装飾を使いまくるほうで、彼との簡単な連絡もそれでやっていた。対する彼は簡素で、文字のみであった。

ほかの男子とメールをしたことがないから普通なのかはわからない。

ちよつと時間をかけて文面を考える。

「今、なにしてる？」とかそういうのを気軽に聞くような関係じゃない。まだそんなに仲良くはない。

彼個人の嗜好であるとか、そういう、次に会った時に話題にできそうなものがない。たとえば「わたしは今納豆食べただけど、ネクラ君の好きな食べ物は？」とか。

いや、もうちよつと長く、でも長すぎず、返事がなくても大丈夫な感じの。

ああ、なんかラブレターみたい。

『ネクラ君、最近あまり会えなくて残念です。またたくさんおしゃべりしたいなと思ってます。わたしの好きな食べ物は納豆と牛丼だよ。ネクラ君も好きだと嬉しいな』

実に頭の悪い文面ができあがった。文字だと一部敬語になってしまうのはなぜだろう。もう少しなにか……と思って『いつか、ちゃんと会えたら』と書いて、消した。

そんなプレッシャーを与えてはいけない。向こうはわたしよりも、もっと顔を隠したが

っているふしがある。会おうとしたら、友達じゃなくなるかも。

会ったとしても、友達じゃなくなるかも。怖い。

震える親指で、送信ボタンを押した。

しかし、一時間ほど待っても返事はなかった。

今までこんなことはなかった。いつも、彼が来られない時も、メールの返事は返しても
らえた。会えなくても行けなかった謝罪のようなものは毎回かさずくれていた。

やっぱり、待ち合わせ以外に使わなければよかった。

わたしはスマホを傍らに置いたまま、眠ってしまい、朝になって見たけれど、やっぱり
返事はなかった。

あ、失敗したかも。

これじゃ、今日の待ち合わせ連絡も、しにくくなっちゃった。せっかくできた友達だ
ったけれど、こんなに脆い関係だったんだな。

ちよっと落ち込んだ。休み時間、いないのもわかっているのに第二図書室に入って、は
あとため息を吐いて、スマホを見つめ、連絡もできずにすぐに教室に戻る。

教室で増田先生が佐倉君と話していた。

「佐倉、頼んでおいた熊、進んでるか？」

「途中でやりましたけど、なんで俺が……先生がやったほうがよくないですか」

「学級委員とは、そういうものなんだ」

「よそのクラスはそんな感じじゃないんですけど……」

あ、なにか学級委員の仕事があったようだ。

学級委員の仕事といっても、ほとんどは増田先生の個人的な雑用でしかないけれど。

「先生、なにか仕事ありましたか」

声をかけると先生が変なものでも口に入れたような顔をして、「瞬黙った。」

「西園寺は忙しいだろうから、いいぞ」

「いえ、暇ですし、やります。熊ってなんですか」

増田先生と佐倉君が顔を見合わせた。

その後の休み時間は佐倉君と一緒に、増田先生の姪っ子の誕生日プレゼントのカードと、
熊さんのぬいぐるみを作った。

ネクラ君、メール嫌だったかな。困らせてしまったかも。

*

夜になって、ネクラ君からお返事がきた。

しかし返ってきたメールは今までとだいぶ様相が違っていて、大量の顔文字と絵文字、謎の記号まで使われて書かれていた。

ツッコミどころは無数にあった。

なんで。なんでこんなところに意味もなくケーキの絵文字が入っているんだろう。「忙しくて」と「なかなか行けない」の間にバイキンの絵文字と謎のお姉さんの絵文字もある。

s(目*目)-6

この顔文字は、もしかして自作だろうか。この顔はどんな感情を表しているんだろうか。こんな見たことない。見たことない感じにいびつ。

人類が滅びた数千年後。地球を訪れた宇宙人が荒れた地を動き回る金属を発見する。それは最後のロボットで、誰もいなくなった大地で、いまだ孤独に地面を整備し続けた。

という、その時のロボットにしか見えない。しばらく眺めて笑った。笑いころげた。

これを見てはつきり気づいた。

ネクラ君はわたしに悪い感情を持つてはいない。迷惑とかも一切思っていない。

わかったのだ。

彼はモテないのだ。

メールがもうすでにモテなかった。

さほど男子と関わりなく生きてきたわたしにもわかる。これは、モテない男子。すごく、モテない男子。女の子とメールなんてしたことないかなり年配のおじいさんがすごく気を使ってがんばって寄せてきてる感じと変わらない。

きつと時間をかけてしたためられた、ものすごくズレたメールだった。

けれど、そのことは逆にわたしを安心させた。

高校に入学してから、たまにわたしに声をかけてくる男子って、ぜんぜん面識がないのに妙に馴れ馴れしいのはまだいいほうで、突然壁ドンしてきたり、頭をポンポンしてきたり、そんなのが多く、はつきり言って怖かった。

彼らは皆一様に女慣れした感じで、自信にあふれていて、どこか自分に酔ったような感じだった。流行りの髪型、作ったような喋り方。そういう風に自分をプロデュースしている。おそらくモテるんだろう。だからあんなに強引で自信満々なのだ。

しかし過度な強引さはモラハラと近く、気障な口説き文句は温度差があると寒々しくしか聞こえない。よもや自分が女子から好かれないうちで有り得ないと思っているので、拒絶するとキレてくる。さらに傷つけられたプライドを回復させるため、わたしを貶めようとしてくる輩も少数いた。

わたしはアレ系の、いわゆるモテる男子が本当に苦手だった。

彼等は笑い声がやたらと大きくて、自己主張が激しい。地味な男子をいじって笑いにしようとしたりする。そんなの面白くもなんともない。

ネクラ君はそういう人達とは違う。すつごくモテない普通の男子。

このメールを見ればわかる。

絵文字の使い方がおかしくて、ところどころこちらを馬鹿にしているような表現になってしまっている。きつとそんな意図はない。これはモテないから。

ぜんぜん腹が立たない。むしろ愛しい。

なにこの人。

胸がきゅんきゅんするのを感じた。

わたし、ネクラ君のこと好きかもしれない。



忙しくてなかな
行けない(目*目)
ごめんなさい
本当は行きたい
っているだけ
この前は、人か
なかなかど
だよ(S唇)
だ
∞
□

◆ネクラ

「薙坂！ てめえ！」
（でぶさか）

「お、おはよう。どうした？」

「どうしてくれるんだよ！ お前のせいで笑われたじゃないか！」

ひりあちゃんから待ち合わせ連絡以外のメールを受け取った俺は、恥を忍んで薙坂にこれから事情を話して相談した。こいつはこんなんでも、一丁前に彼女がいたことがある。一週間で振られていたが、俺からすると一週間も彼女がいたなんて恋愛マスターだ。

「え、なんで。ちょっと向こうに合わせて、こっちも感じ悪くならない程度に絵文字とか入れろって言っただけだろ」

「入れたよ……大失敗の感觸だよ……二時間ほど笑いころげていたらしい」

「ちょっと見せてみるよ」

「えー、嫌だな。なんで好きな子とのやりとりをお前なんかに見せなきゃなんのだ」

「文章は脳内に入れないから、見せろ。見なきゃなんも言えん」

しぶしぶ表示させて見せると薙坂は「うわあ」と声をあげた。

「これ、入れすぎだよ。控えめに言って、宇宙からのメッセージだな」

「使いすぎたかな？ 多いほうが……賑やかでいいと思う」

「目がチカチカする……文字のほうが少ないじゃねえか。読みにくい。イカ釣りの船を思い出すぜ」

俺はそもそもスマホを持ったのも高校からだっだし、せっかく買ってもらったのに、ろくに使っていないかった。

今まで女子と連絡先を交換したこともなかったし、薙坂や小学校時代のごく少数の悪友達か家族くらいしか連絡したことがなかった。その連絡も最近ではほとんど電話ですませていたし、文字での連絡はしても必要最低限。簡素なものだった。

だから以前からひりあちゃんを送ってくる待ち合わせメールにたまについている記号や小さい顔のイラストや、マークなども初めて見た。出し方がまずわからなかった。

「なあ、なんでお前ここにトランクスの絵文字入れたの？ その横に∞が置いてあるのに意味はあるのか？ パンツは無量大数のか？」

「え、装飾だし、なんかクリスマスの飾り的な感じで縁取った」

「パンツで縁取るなよ！」

「わかった……なるべくパンツでは縁取らない」

薙坂は俺の恥ずかしいメールをさらに見てまた吹き出した。

「なあ、総士^{そうし}、これ自分で入力したのか？」
「え、どれ」

「この、唇^{くちびる}」
(\$ €)

「うん、顔っぽく……作った。なんか向こうも似たの書いてるし……片目瞑^{つぶ}ってるみたいに見えるだろ」

「孫に合わそうとがんばるじいちゃんかよ！ 総士、これは……こんな猟奇^{りやうき}的なものを作らなくてもあるんだよ」

「え、できあいのものが？」

「お惣菜^{そうざい}みたいに言うな！」

「はア」

「ほかにも、これ！ この包丁の絵文字なんでここに入ってる？」

「なんでつて……そもそも全部飾りだろ」

「絵文字には意味があんだよ！ 包丁の隣^{となり}に老人の絵文字配置しちゃ駄目^{だめ}だよ！」

「え、意味があんの？」

なんだそれ。文字の間が無意味に装飾^{そうしよく}されていると思っていた記号や絵に、意味があった？ それは新しい言語じゃないのか。

それなら俺は今までメールの全文を読み解けていなかったことになるぞ。ゾツとした。遺跡調査員^{いせきさうさぎん}の気持ちで冷静に見直してみれば、その言語を読み解くのはわりと簡単だった。

ひりあちゃんのメール『会えなくて残念』の隣にあるのは泣いている顔。

おそらく、この小さなイラストは文字の代わりや補助を担^{にな}っている。

俺は『ごめん』の隣にニヤついたヨダレの出てる顔をたくさん連続で配置してしまった。

これは、馬鹿^{ばか}にしていると思われてもおかしくない。

思い込みとは恐ろしい。可愛いひりあちゃんが使った可愛い飾りと最初に思ったせいで、なんでだか簡単なことに目がいかなかった。

「これ見てドン引きせずに笑われただけですんだならよかったな」

藪坂^{やぶさか}がどこか不満そうに言う。

「そ、そういう子じゃないから」と震え声^{ふるこゑ}で言うと言勢^{こゑ}い込んでまくし立ててくる。

「お前は！ 顔しか！ モテる要素がないのだから！ 大人しく顔で彼女作って幻滅^{げんめつ}されちまえばいいんだよ！ それがなんだ！ メールでちまちま顔も知らない女子と恋愛だ

あ？ ユーツ、ガットメールかよ！ ライアンはこねえぞ！ 来ても王宮戦士の方だ」

「お前、ときどき俺にわからないネタをまぜてくるよな」

薙坂はゲームや映画や漫画をたくさん買い与えられていて、遠慮なくネタを混ぜてくる。彼はケツと言って偉そうに腕を組んだ。

「どーせバケモノみたいな顔の女だよ」

「俺はどんな容姿でも愛せる。本当に……本当に可愛いんだよ」

「姿を見た時本当にそう言えるかな？」

「言える」

「……探してみようぜ」

「え、それはマナー違反じゃないのかな」

「お前だって本当は気になるだろ。ヒントよこせよ」

「ヒントは、ほばないな。クラス替えがあつたと言っていたから、二年生だと思う」

「なんかあるだろ……声は？ どんな感じ？」

「ものすごく可愛いな」

「感想じゃなくてヒントをよこせ！」

「そうだな……すごく似てる声を知ってる気がするから、女優とか声優の誰かに似てる可

能性はある」

「誰だ？ 誰だ？」

「うーん……今思い出せない」

薙坂がオイオーイと大げさなジェスチャーで落胆を伝えてくる。

「じゃあ声以外！ アドレスとかは？」

「名前の類は入ってない」

話していてもまったく特定できる感じではなかった。

同じ学校で性別が女。それだけで校内からひとりを探すのは無理がある。

「あ、牛井と納豆が好きみたいだ」

「なんかだいたいぶ太ましい女浮かんだぞ」

「可能性はあるな……」

「太っていて、友達のない女ならそうたくさんはいなさそうだな。がんばれば探せそうだな

……総士、お前のクラスは？」

「うちのクラスにはいないな」

そもそもが、実際話した印象からも、ひりあちゃんはい子はうちのクラスにはいない。いればさすがに気づくだろう。

黙^{だま}って考えていた薮坂がどこか苦い顔で言う。

「オレのクラスにはすごい重量感の女いる……」

「えっ、そうなのか？」

「いや……でも、友達はいくはないし……言葉使いはきたねえし……すごい性格してんだよ」

「そうなのか……でも、もしかしたら……」

「オレ、そいつにピーナツバターを顔に塗^ぬられたことあんだよ……そのあと鼻にピスタチオを詰められた……本当にそいつの可能性あるのか？」

「その子とはかく……いったいお前はなにをしたんだよ」

ひりあちゃんは、そこまで武闘^{ぶとう}派な感じはしない。たぶん違うだろう。

「念のため見る？」

「お、おお」

薮坂のクラスに見にいくと、巨体^{きょたい}の女子生徒が小柄^{こがら}な男子生徒を乗せた椅子^{いす}を高々と持ち上げていた。周りの生徒達が「ほおおー」と感心した声をあげている。

「違うな」

「本当に？」

「うん。彼女はあんな堂々としたエンターテイナーじゃない。それに、あの子友達いっぱいじゃないか」

「じゃあ隣のクラスにもぼっちゃりした子、確かひとりいるぜ」

「ううん……」

そもそも牛井イコール肥満という考えが安直だし、根拠^{こんきょ}が希薄^{きはく}すぎる感じがしてきた。

「やっぱいいい。隠^{かく}れて探^{さが}すとか、気がとがめる」

「そうか？ でも気になるだろ」

「そりゃ、なるけど……」

そうこうしていると教室から先ほどのひりあちゃん候補の子が友達と一緒^{いっしょ}に出てきた。違う^{ちが}だろうな、とは思ったけれどついじつと見てしまう。

目の前を通^すった元ひりあちゃん候補の子が、激しく笑った拍子^{ひょうし}に隣の子とぶつかってバランスを崩^{くず}してよろめく。俺の胸に衝突^{しょうとつ}して「ぎゃっ」と声をあげた。

ぱつと見ると俺の制服のボタンに、その子の髪^{かみ}が絡^{から}まって、引っかかっていた。

向こうもびっくりしただろうが、こっちも慌^{あわ}てた。彼女が離^{はな}れようと、強引^{きやういん}にバタバタと暴れるようにもがいたからだ。

「動かないで」

そう言うとその子がびたりと動きを止めた。

ボタンから髪をほどこうとしたけれど、くせ毛なのか、なかなかとれない。

困った。どうしよう。

焦った俺は自分の制服のボタンをぶちんとちぎり取った。

周りから悲鳴のような声がある。

え、なんか悪いことしたかな。

「女の子の髪を切るわけにいかない」

言い訳のように口に出すと、目の前の彼女もこくこくと頷いてくれた。

「あ、ありがとう……佐倉君」

じつくりと真剣に声を聞いて確認する。やっぱ違う。この子はひりあちゃんではない。

「薮坂、行こう。一応隣も見たい」

声をかけると啞然とした顔で見えていた薮坂が戻ってくる。

「お前、なにどさくさ紛れにマンモス落としてんだよ」

「え、誰？」

「さっきのやつのおだ名だよ……あいつ、あんな顔すんだなあ……」

結局、隣のクラスの子も友達に囲まれていて、明らかに違う感じだった。

しかし、そこらじゅうの多くの女子達が、ひりあちゃんの可能性がある。世界が愛しくなってくる。

教室に戻ろうとするとどこかへ行っていたらしい西園寺さんと扉のところで鉢合わせた。

一瞬だけどちらも譲ろうとするが結局同時に中に入ろうとして、軽く密着する。

小さく「いたっ」と聞こえる。

見ると西園寺さんの長い髪のが、俺の制服のボタンに絡まっていた。

一個取れてるのに、別のやつに。なにこのボタン、女好きなのかよ。

あつけに取られていると西園寺さんは俺のボタンのすぐ手前の髪の毛の先ともう少し先を掴んで構え「えい」と小さな掛け声と共に素早くぶちぶち、と髪をちぎった。

それから「ごめん」と小さく言っただけで自分の席に戻っていった。

◇ヒリア

わたしは校舎裏でサングラスに黒いカラスマスクをした女子の集団に囲まれていた。

「私達は佐倉君を見守る会のものです。一年の時から彼を見守ってきました。西園寺さん、貴女は彼と付き合っていますね」

とんでもない。ぶんぶんと首を横に振る。

「貴女がこっそり彼と会っていることは確認済みです」

「は、ハあ？」

「私達はこの緊急事態に話し合いました」

「話し合うって、なにをしたの？」

「おほん……おのおの彼への想いを整理し、述べ合いました。結果、彼個人とどうにかなりたいたいという種類の恋心を持っている人は我々の中にはごく少数でした」

「え、そうなの？　なんで？」

わたしの素直な疑問に数人の声がいっせいに混じり合う。

「佐倉君は神聖なもの！　付き合いたいなどめっそうもない！」

「あたし佐倉君のファンだけど、できれば男子と付き合ってほしい！」

「私は顔が好きだけ！　別の学校に彼氏いるし」

「私も、ほんとは山本君が好きだし」

複数の声がいっせいにまちまちなことを言って、中にはどうかと思うようなものもあった。共通見解としてはやっぱり見る専用というか、共有財産的な扱いらしい。

リーダーの脇に控えた小柄でぼつちやりした会員が突然大声で「しかーし！」と叫び、

皆がびたりと黙り込む。

リーダーがおごそかに頷き続ける。

「しかし、我々は、我々の中の誰が彼と付き合うのも、許せなかったのです。我々の掟では、抜け駆けは厳禁。プライベートへの介入はご法度。彼本人の意思の場合を除き連絡先も聞いてはなりません」

「は、はい」

つまり、自分は付き合いたいほどではないけれど、周りの誰かが抜け駆けするのは許せないし、誰のものにもなつてほしくないという。……わりと自分勝手だな。

「しかし、長い長い話し合いの結果。西園寺さん、貴女なら、皆許せるとの結論に達しました」

「なんでだよ……」。

「私達は貴女を認めます。貴女なら、佐倉君の隣に立つ女性としてふさわしい。なにより彼の幸せを邪魔だてするのは如何なものかとの意見が複数出ました」

認めなくていいし、なにを言っているのかもよくわからない。

「それにあたり、ひとつ約束をしてほしいのです」

「な、なにを」

「まず四十九人の彼氏とは……」

リーダーの隣の子が彼女の肘をつつき、手帳を見ながら「五十人です」と訂正した。

「おほん。五十人の彼氏とは別れて、佐倉君とだけ真面目に付き合ってほしいのです」
こっそり会ってるとか、彼氏五十人とか、いったい誰の話だよ……。

「彼氏、いないし……」

「それは、すべて別れて佐倉君一筋になったと解釈しても……?」

いや、解釈違う。もともといない。ていうか、佐倉君とは仲良くもないし同じクラスの学級委員というだけなのに。向こうもわたしのこと苦手で、なるべく関わらないようにしているのに。

なんでこんなことに巻き込まれてるの。

色々口を挟もうとするけれど、彼女達はヒソヒソ言いながら勝手に納得している。

「さきほども言ったように我々佐倉君を見守る会は貴女の味方です。しかし、話し合いの過程でそうではない少数の人達は分離しました。新しく発足された佐倉総士・愛・連合会は人数こそ少ないですが過激派もいます。彼女達は本気で彼を愛しています。くれぐれもお気をつけて」

そう言って去っていった。

割となにを言っているのかわからなかった。

呆然としてしていると集団の去った方角から声が聞こえた。

「お前河合か! ぶははは! なんだお前からそのマスクは! 悪の組織みたいだぞ!」

増田先生が爆笑する声が響く。

どうやら見守る会のリーダーは同じクラスの河合さんだったらしい。だいぶそんな気はしていただい。

その後、教室の少し手前でさっきの集団を見かけて慌てて駆け寄る。

「待って! 待って、河合さん」

「え、ちょっと、恥ずかしいからこの格好の時に名前を呼ばないでください」
恥ずかしい自覚があるならやるなよ……。

「誤解があるようだけど、わたし、佐倉君のこと別に好きじゃないから」

「ええええええ!!」

「さッ、西園寺さん、佐倉君を好きじゃないのー!」

「うっそだー!」

会員達がいっせいにどよめく。ほかの人まで集まってきた。ひそひそ声が聞こえる。そんなに驚くことだろうか。

「西園寺さんは佐倉君が好きじゃないらしい」

「むしろ苦手なのか」

「嫌いらしい」

目の前で情報があからさまに歪<ゆが>んで伝播<でんぱ>していつている。

嫌いつてわけじゃないんだけど、それを説明しようとする今度は「やっぱり好きなんだ」と言われてまた面倒<めんどう>くさそうな予感がすごくしたので、黙<だま>っていた。

「あつ、佐倉君」

声が聞こえてそちらを見ると佐倉総士その人がいつも通りの落ち着いた顔で背筋まっすぐに歩行してこちらに向かつてきていた。

あ、これはたぶん聞かれた。

よしんば聞かれてなくてもガツツリ誤解込みで、本人に伝わるのは時間の問題。

でも、弁解ににくい。今弁解すれば絶対こじれる。

嫌いというのは語弊<ごへい>があるが、彼のことを苦手なのは本当だった。

佐倉君がその静謐<せいひつ>で鋭い視線をわたしに一瞬だけ向けたけれど、すぐに何事もなかったかのように前を向いた。

そうそう。この人はいつもわたしなんて歯牙<しが)にもかけない、視界にも入れない。

もともとわたしのことなんてちよつと煙<けむ)たがるような態度をとっていた。

その後ボールの顔面直撃<けんめんちくげき>を防いでもらったり、学級委員の仕事を一緒にやったりして、それが悪意までいくようなものではないとわかったので少し申し訳ないけれど、わたしひとりに嫌われたからといって、周りにはたくさん女の子がいるし、そこまで気にしないだろう。そうは思うけれど。実際逆の立場だったら少し落ち込むだろうとも思う。

なにもしてないのに、嫌われるとか、原因を考えたりしてしまうかもしれないし、少なくともわたしのほうは罪悪感で落ち込んだ。

間の悪いことにその日の放課後、学級委員の定例会があった。

佐倉君はいつも同じ場所に行く時も誘<さそ>い合わせたりせず、勝手に行く。そんな様子を見てもやっぱり友好的ではない。少なくともほかの委員会の子達はふたりで一緒<いっしょ)に行っている教室に入っ、佐倉君の隣に座った。一度馴れ馴れしいかと思つて少し離れたところに座ったら先生にクラスごとに座れと言われたことがあるからだ。

なんとなく、いつにも増して隣が見られない。

謝ったほうがいいかな。いや、直接なにか言つたわけでもないのに、それも変かな。

今親しげに話しかけたら、逆にしらしらしい感じもするよね。そんなことをずつと考えていたら、先生の話も全然頭に入つてこない。酷<ひど>いことをしたのはわたしのほうなのに、

なんだか泣きたくなつてしまつて、ずつと涙をこらえていた。
気がついた時には定例会は終わつていた。

隣の佐倉君がガタンと席を立つ気配ではつとなる。

佐倉君はこちらを一度も見ずに、姿勢良く、いつそ急いでいるかのようにさつと教室を出た。

その背中を見送つて、わたしは鼻をすん、とすすりあげた。

やっぱりもともと佐倉君のほうがわたしを嫌いなんじゃないかな。ぜんぜん気にしてない。そう思うと少し楽になるような、だけどやっぱり悲しいような気もした。

だつてそれって、わたしという人間なんて、いてもいなくても、どう思つてようが、まったく関係ないってことだから。

いてもいなくても一緒。

それは、とても悲しい。

落ち込んでいるところにスマホが震えた。

この時間わたしに連絡してくる人はほかにいない。

急いで物陰に隠れてポケットからスマホを取り出して見るとやっぱりネクラ君だった。

『今、第二図書室にいるけど、もう帰っちゃつてるかな?』

ものすごい速さでスマホをタップした。

『すごいか』

急ぎすぎて海の生き物が召喚されたことにも気づかず、わたしは第二図書室へと走った。
わたしには、わたしのことを気にしてくれる友達がいる。

◆ネクラ

放課後、第二図書室の奥で足を伸ばして待っていると、パタパタと走る音が近付いてきて、威勢のいいバン、という音がした。

「走つてきたの?」

「う、うん。だつて、早く行かないと帰っちゃうかもと思つて……」

はあ、はあ、と走ったあとの吐息混じりの声で言われて頭がぼうつとする。

吐息まで可愛いとか……いかん、あらぬほうに思考がいきそうだ。

「俺が呼んだのに帰ったりしないよ。ちゃんと待つてる」

俺は日が暮れても、夏休みが来ても、学校が廃校になつても、そのまま数千年の時間が経ち、人類が滅亡したとしても待つている。

「うん、でも、だつて、早く……」

「落ち着いて、座って息を整えて」

西園寺さんになぜか嫌い宣言された時は少し落ち込んだけれど、仕方がない。

俺はもともと女子に囲まれているほうがおかしい人間だし。

でも、誰に嫌われても、俺にはひりあちゃんがいる。だからそこまで落ち込まなかった。

俺には理解者がいる。可愛くて最高にいい子。たとえ本棚の反対側にいるのが声の可愛い野生のカバやハシビロコウだったとしても俺は変わらず愛してしまうような気がする。

「マスト」

「えつと、トマト！」

「とうふ」

「うーん、ふんどし！」

ふわふわした思考の中会話をして、俺はひりあちゃんとしりとりをしていた。

「ひ、ひりあちゃん、ふんどしのこと知ってるの……」

「え、ネクラ君ふんどしと知り合いなの？」

「女の子は知らないと思って……」

「ネクラ君はブラジャーのこと知ってる？」

「なッ、ぶ……！ 知り合いではないけど……一応名前だけ……ナマエだけだよ！」

「知ってるじゃん……。ネクラ君、女の子というものに対してイメージが偏ってるよ。そんなに周りに女の子いないの？」

「クラスにはいるから、なんとなく話を聞いたりはしてるけど……誰もふんどしのことなんて言わないから……」

「そ、それはそうかも、ごめん」

「いや、でも俺が偏ってるのは確かだと思うよ」

「ほかにはあるの？」

「え、」

「女の子が、男と違うと思うってこと」

「え、そんなには。……ゲロ吐かないとかかな」

「いや吐くよ！ なにさらつとんでもないこと言ってるの」

「え、吐くの？」

「吐かないわけじゃないじゃん。気持ち悪くなったらドバドバ吐くよ！ 本気じゃないよね？」
「う、うん。よく考えたら同じヒト科のホモサピエンスなんだから、身体の構造として、吐くほうが自然かもしれない……」

本気かと言われると、本当にそう思っていたわけでもない。漠然と、想像できなかった

というか。なにか別の種族の生き物かと思っていたというか。むしろ、吐いてほしくない、とかそっちに近い感情かもしれない。幻想を抱いていた。

女子に指摘されると恥ずかしさもひとしおだ。

「でも、わたしも昔、男の人はパンツはいてないと思ってた」

「なんで？」

「ドラマとか映画で、立ったままチャック下ろしておしっこしてたから、なんとなく……」

ひりあちゃんがうふと笑って言う。

可愛い。なにその可愛い勘違い。

ていうかひりあちゃんさつきからゲロとかブラジャーとかおしっことか、可愛い声でとんでもない単語たくさん言ってる。俺の周りの女子からは、一年以上周りで話しているのを聞いていても一度も出てきたことのない単語ばかりだ。女子はそういうことは言わないと思っていた。

でも、ぜんぜんガツカリとかしないし、むしろ得した気持ちでいっぱいだ。

「そうだ！ ネクラ君で……」

「え、」

「なんでもない」

「言ってみてよ」

「ううん……この質問はやめとく。その、わたし、もうちょっとネクラ君のこと、知りたくなって……思っただけ……困るよね……」

こ、困らないけど、困る。可愛すぎて、困る。

頭がカーっとなつて、呼吸もできずにいると、本棚の向こうから慌てた声がくる。

「ご、ごめん！ 聞かない！ 聞かないから……」

「え、」

「余計なこと聞かないから……これからも、こうやって友達として会ってくれる？」

思わず本棚とは反対の壁に頭を強く打ち付けた。なぜそんなことをしたのか、とにかく落ち着くにはそうするしかなかったのだ。ガツ、と鈍い音がした。

「ネクラ君？ ネクラ君？」

本棚の向こうから立ち上がるような音と不安そうな声が聞こえる。慌てて口を開いた。

「あつ、ごめん！ ちょっと気を失いかけてた。俺、ひりあちゃんと話してて楽しいから、これからも会いたいし、知りたいことあれば、なんでも答えるよ」

向こうの気配がまた動いた。また座り込んだような気配。

ほうっと小さく息を吐く音もした。

なんでも答えると言ったけれど、結局とりたてて質問は来なかった。代わりに聞こえてきたのは「もうすぐ夏休みだね」だった。

「あ、そうか……でもまだだいぶあるよ」

話題としてはだいたい感じが早い感じだけれど、なにかをこまかすためだったんだろうか。「夏休みは嬉しいけれど、ネクラ君に会えないのは寂しいな……」

「デイツ？」

「だってわたし学校、ほとんどネクラ君に会いにきてるだけなところあるから！」

「ええっ！ 俺のこの性格知った上でそんな風に言ってくれんの？」

「わたし、ネクラ君の性格大好きだよ」

「ゴッぷお！」

俺も。俺もすごい好き！ 言えないけど！

顔が見えないこの状況での性格が好き。それはもう好きってことでいいかな？ 駄目かな？

な？！ どう思う？ 菓子ちゃん！

菓子ちゃんはカサカサ揺れながら、相変わらずの平坦なイントネーションで『そーしくん、むちゃくちゃきもーい』と言ったので自分の中にいくばくかの落ち着きを取り戻した。

『向こうは、はつきり友達って言ってるじゃーん、そーしくんが異性ということを意識していないから、そういうことをバンバン言えるんだからねーわかる？ わかったらしねー！ キモいひとー！』

菓子ちゃんが俺を冷静にさせる。普段は『パフェたべるー』とかしか言わないくせに、俺の希望を打ち砕くときだけ、らしからぬ論説を使い饒舌に攻め立ててくる。

冷静に。冷静に。俺のほうも友達としての好意を意識せずに伝えればいい。

「お、俺も……ひい……」

ひりあちゃんの性格好き。ていうか声も好きだし、なんかもう存在そのものが大好きなんだけど、女子にそんなこと言ったことないものだから、結局途中で声がかえて爺さんの悲鳴のようになった。しかし、充分内容は伝わったようだった。

本棚の向こう側で彼女が身じろぎするような衣擦れの音が聞こえる。

「わああ……嬉しい……」

可愛い……。

見えないのに、抱えた膝に顔を埋めて隠す。

そろそろ普通の友達になりたい気もする。

だけど、変に姿を隠してしまっただけで余計にそれをしづらくなってしまった。

しかも俺、悪目立ちしてるし。せつかく仲良くしてくれてるのに、素性が知れたらひりあちゃんみたいな子は萎縮して同じように接してもらえなくなるかもしれない。

彼女はネクラではなく佐倉である俺のことを知っているのか。

知っていたとして、悪い印象はないか。そこもわからない。たくさん懸念はある。

そしてお互いの感想がどうであろうとも、関係は確実に変わる。声だけの、どこか匿名性の高い状態の会話と、お互い姿を認識しての会話は、近いようでまったく違う。

それにまず、俺だけじゃなく彼女の意思もある。

ごくりと唾液を嚥下して、口を開く。

「ひりあちゃんは、俺の名前とか、顔とか……知りたい？」

その質問にはまず長い沈黙が返ってきた。

「……知りたいけど……わたしのほうが、イメージと違って、ガツカリされちゃったりするの、怖いから……いい」

「そ、そんなこと……!!」

「それに……」

「え、」

「なんだか、恥ずかしいから……まだ、いい」

ふしゅうつ、と息が漏れた。自分の顔が、耳まで熱い。なんだこれ。なんだ。

◇ヒリア

佐倉君のことで少し落ち込んでいたけれど、ネクラ君と話したらすぐ元氣になった。

悲しくなった時は友達と話したら、もつと言うと好きな人と話したりしたら、すぐ元氣になれる。なれないはずがない。

ネクラ君とは時々だけれど、待ち合わせ以外のメールもするようになった。

もちろん送るのはほとんどわたし。彼の返信は変な絵文字と顔文字はやめたのか、文字だけの簡素なものに戻っていた。あのあと話した時にだいぶ恥ずかしがっていたし、彼の話し方を知っていて頭の中で変換できるので別に気にしない。わたしのほうは彼の考案した顔文字を辞書に登録してたまに使っているけれど、それに関してはちょっとだけ嫌そうにしている。

わたしとネクラ君は仲良く友達をしている。

進化も変化も進歩もないけれど、楽しくて幸せな日々を謳歌していた。

変化といえば佐倉総士。彼の雰囲気が少し変わった。

彼の潔癖そうな凜々しさと、繊細で危ういような色気は、今まで八対二くらいで、凜々

しさが勝っていた。それが、ここ最近色気の割合がぐっと増した。

肉体的な成長も少しあるだろう。背はもともと高かったけれど、どこか華奢な感じだったのが骨ががっしりしてきた気がする。

しかし、やはりその変化は内面によるものが大きいだろう。以前は女の子達に囲まれていても無表情に近い冷静な顔をしていた彼は、少しリラックスしているような穏やかさを身に纏い始めた。

返答内容はさほど変わっていないのに、ほんのわずかな笑みのようなものが混ざるだけで、印象はだいぶ変わる。シャープだった雰囲気が一段柔らかなものへと変化していた。

さらに言うならどこことなく機嫌がいい。増田先生と話しているのに上の空で相槌をうちながらニヤついていたりする。なお、ニヤついているというのはわたし個人の感想で、周囲の女子は微笑んでいる、と表現していた。

先日は「なにかいいことあったの?」と聞かれていた。

彼はそれに「特には」と簡素に返していたが、夏休みにずっと会えなかった某国の姫との再会の予定が控えているのだと噂が広まった。

ああいう人が夏休みになにをしているのか、想像する余地もない。

*

その日は月一の全校清掃の日だった。

通常の掃除当番の掃除とは別に、朝の時間を使って全校で掃除するのだ。

短い時間、特に割り当てもないので、皆適当な場所を拭いたりしてお茶を濁す。

割り当てのない掃除は自主性や要領の良さが顕著に出てしまう。

わたしは仕事を見つけるのが下手だった。

簡単な仕事は人気でぱっと人が埋まる。

だからなるべく面倒そうな場所や、汚れそうな場所を選んで手伝わせてもらいに行く。

そのたびに「西園寺さんはいいですよ」とか言われて、廊下の端に所在なく立っていた。この時間はいつもそうで、割と苦痛だった。

校長が通りかかってわたしを見て手招きした。そうして、近くの廊下の窓を拭いていた佐倉君も呼ばれて、体育館へ向かう途中の屋根のある通路に連れていかれる。

「ここ、てしゆり」

「はあ」

「埃がね……!」

「わかりました」

「あと、あしよこ！ 葉っぱが少しね」

「わかりました」

校長は「うんむ。よろしくね」と頷いてどこかへ行ってしまった。

とりあえず言われた通り周囲をざっと掃除する。

近くを雑巾で拭いていた彼がふっと遠くの空を眺めて「はあ」とため息を吐く。

この頃になると、いかに疎いわたしでも、なんとなく彼が恋をしているのではと思うようになった。そう思うとしつくりくるような目をしていることがある。

わたしは佐倉君は好みではないけれど、あんな目で見つめられたら大抵の女の子はドキドキするだろうというのはわかる。

しかしながら、しらけた怒りも胸に湧いた。

彼女がいるなら周りにもそう言えよ！

付き合っていないならさっさと付き合え！

そうしてくれていたらわたしと彼とこんなに気まずくなることもなかったのに。

まあ、某国の姫のほうにも色々簡単じゃない事情があるのかもしれない。

ふと、思いつく。ここは周囲に人があまりいないから、スマホ出してもバレなそう。

出してるの見つかったら放課後まで没収だけど、近くに先生もいない。

佐倉君からそおと離れて、屋根の支柱の端っこを拭きながらスマホを取り出し、ぼち

ぼちした。

『掃除してよー。眠いよー』

送信したあと周りをキョロキョロしたけれど、人は遠くにしかいなかった。

唯一近場にいる佐倉君を見たけれど、彼のほうも自分のスマホを出して見ていたので、こちらの動きには気づいてなさそう。

『掃除かつたるいね。俺も眠い』

スマホが手の中で震える。短いけれど、ものすごい速さで返事が返ってきた。

ネクラ君も、どこかを掃除しているのだ。

『いい天気だもんね！ わたしこのあと寝ちゃいそう』

ニヤつきながらまたスマホをぼちぼちする。

雑巾で勢いよく柱を拭いていると、また返事が返ってきた。

『俺も眠くなってきた』

短くて中身の無い、本当にしょうもないやりとり。スマホの前でニヤつく。

『ネクラ君に会いたいなー』

送った直後、背後でガシャンと大きな音が聞こえて、振り向くと通路の反対側の柱の下で佐倉君がバケツを足にひっかけて倒^{たふ}していた。

よかった。ぜんぜんこちらを気にしてない。安心してさらにメールを送る。

『そうだ。終業式のあと、会えないかな唇[€]』
(\$)

『もちろんいいよ。でもその顔はもうやめて!』

思わずくすくす小さな声を立てて笑ってたところ、遠くに校長先生が見えて、慌^{あわ}ててポケットにスマホを落として手すりを拭いた。

校長先生は「おわったかにゃ?」と言いながら辺りを見回した。

難しい顔で「ンン……ンンン」と唸^{うな}りながら周辺をチェックする。

そして、ンムつと頷いた。

「おちゆかれさま!」と笑ってわたしと佐倉君を手招きしたので、逆方向にいたわたし達は中心部の校長先生のところに集まった。

「こりえ! ナイショで食べてね!」

可愛い口調でわたしと佐倉君の手のひらにひとつずつ、ミルクキャンディーを置いた。

ママの味がするとかしないとかいう可愛い包みの商品だ。

思わず佐倉君を見ると、彼もわたしを一瞬^{いつしん}だけ見たけれど、目を合わせてはいけない気がして同時にバツと目をそらし、教室に戻^{もど}った。

◆ネクラ

今日は終業式。

結構前から、式の後に第二図書室でひりあちゃんと会う約束していた。

朝つばからウキウキがとまらない。

朝から上機嫌^{じやうきげん}で教室に入ると西園寺さんもご機嫌だった。

増田先生と話しているその声がいともよりワントーン高くて、表情も生き生きしている。これは、明らかに夏休みを喜んでるんだらう。

西園寺さんといえば、最近また美しさに磨^{みが}きがかかったと評判だった。

水の姫と言われるだけあってもと可愛いのに、ミステリアスな印象だった彼女は、最近ほんのわずかな表情が出てきた。鉢^{はち}合^あわせて挨拶^{あいさつ}して、うっかり愛想笑いなんてされた男子生徒はあとで悶^{もん}絶^{ぜつ}して、トイレットペーパーをむしゃむしゃ食べていたという話だ。

お昼休みに頬を薔薇色に染めて、どこかへ消えるという噂もある。その時間は隠れてこっそり彼氏と電話してて説が濃厚らしい。

西園寺さんに好かれる男というのが、まったく想像できない。学校のやつらは微笑みかけられるだけで無機物を食いだすありさまだし、彼女は誰のことも好きにはならないような神聖さもあつた。そのくせその微笑みには小悪魔感もある。本当に恐ろしいお方だ。

それでもほんの少しとつきやすくなくなったせいなのか、この間は一年生の男子に声をかけられているところに遭遇した。

見るともなく見ていると、ものすごいことがおこった。

男子生徒がなにを言ったかまでは聞えなかったが、彼が二言、三言、他愛ない顔でなにか言った。

それを受けた彼女が困った形に眉をほんのちよつとひそめただけで、近くにひそんでいた男子生徒がドヤドヤ出てきて件の生徒は廊下の奥にすーっと引き戻されていったのだ。まるでカンダタのあとに続くこうとする地獄の亡者たちのようだった。

すごいものを見た。

男子生徒の消えた方向を覗きに行くと「田中！ このアホ！」この身の程知らずが！」などと袋叩きにあつていた。恐ろしい。

俺の知らない本当のモテの世界がそこにある気がした。

俺は相変わらず女の子は周りにいるが、いつまで経つてもモテない男の心を保有していた。女子に囲まれている時も、自分でも「コイツつまらないなあ」と思うような返答しかできていないし、いまだに顔も正面からは見られない。チラ見して名前と一致させるのも至難の技だ。

結論。西園寺さんはマジモンのモテる人。俺とは住む世界が違う。

*

「ついにこの日がきてしまったー」

終業式のあと。第二図書室で、ひりあちゃんがこの世の終わりのごとく嘆いていた。

「ネクラ君、夏休み明けてもわたしのこと覚えていてね！」

忘れるはずがない。俺は記憶喪失になって日本語を忘れても、ひりあちゃんのことだけは覚えていた。

「たまにメールしてもいい？」

「うん」

「たまにじゃなくて、しょっちゅうでもいい？」

「うん」

返事を聞くとほっとしたように「じゃあするね」と答えた彼女だったがその一瞬あとにはまた落ち込みだす。

「あー……あー……でもやっぱりさみしいなー」

ものすごい嘆きようだ。毎日会っていたわけじゃないし、会っても俺のほうはそんなに面白^{おも}おかしい話術で楽しませていたわけではない。断じてない。

むしろ、わざわざ会ってるのに退屈^{たいくつ}させてるな、とか、うまく広げられなかった、みたいな不発の会話はたくさんあり、寒いことを言ったとかキモいことを言ったとか、後悔^{こうかい}や反省ばかりは大量にあった。

ぶっちゃけ俺のほうは、ひりあちゃんが反対側にいるこの空間で五時間ほど黙^{だま}って座っているだけでもおかしな脳内物質が放出されまくりホンワカと幸せで楽しい気持ちになれるので、内容は割とどうでもいい。

どうでもいいのに、ひりあちゃんは可笑^{おか}しくて可愛いことを乱発してくるので俺のほうはこんなに楽しい時間がこの世にあったのかと思うくらいとても幸せに思っていた。

もしかして、この子誰かに雇^むわれてるんじゃない、と思わず疑いたくなる。

誰に。未来の俺だ。

彼女いない歴六十五年に至ったその日、後悔ばかりだった高校時代に楽しいことをさせてやろうと、タイムマシンであるデロリアンに乗ってこの時代に降り立ち、ひりあちゃんに依頼^{いはん}に……。

そこまで考えたところでひりあちゃんの声で我に返る。

「ネクラ君の、好きなタイプの女の子は？」

「えっ、なにが」

「……色々考えたんだけど、個人情報に触^ふれない質問が、逆になくて」

「え、ああー」

そうか。この間質問すると言って、結局聞かれなかったのは、プライバシーに気を使ってくれたからだだったのか。

「別に、なんでも聞いてくれていいよ」

それで自然にバレたなら、それでもいい。しかし、名前とかクラス以外の情報なんて、どれもこれも核心^{かくしん}にはそう近くない気もする。誕生日だって、みんなに聞いてまわるわけにもいかないし、血液型や家族構成だって同じようなやつがゴロゴロいる。

「うん、好きな女の子は？」

「え？ さっきと質問微妙^{びみょう}に変わってない？」

「あ、そうかそうか。てへへ……好きな女の子のタイプ」

「う、うーん」

俺の好きな子はひりあちゃんだし、好きなタイプもひりあちゃんだけど、そんなこと言えるはずもないし、ルックスのタイプを聞かれているとしたら答えにならない。

話しやすい子が、好き。

これ、どうだろう。

口を開きかけると菓子ちゃんが呼んでもいないのに『キモモモモ！』と言って登場した。

『婉曲^{えんきよく}にきみが好きですって言ってるみたーい！ よく考えてー！ 想像してー！ そう
いうのー、好きじゃない奴^{やつ}にやられたら？ 女の子はー？』

き、キモいです。ドバドバ吐^はきます。

『じゃあやめなー！ ここは無難な答えが大正解なのー！』

無難って言われても……。明るい子とか、そんなの、ひりあちゃんは俺から見たら明るい子だけど、自分では友達がいなくて暗いと思っている可能性だってあるじゃないか。

そういう、ひりあちゃんとまったく違う可能性のある答えは駄目^{だめ}だ。かといって、本人に近すぎても駄目……吐かれる。どうしたらいいんだ。

「ネクラ君？」

「ない……」

「えっ」

「好きなタイプ、ない」

「ほ、本当に？ 少しも？」

「あえて言うなら、健康な肉体を持つ……ヒト科……できれば人類……できれば女性」
最大限にキモくないように言ったのに、ひりあちゃんが笑って言う。

「あ！ わたし、あてはまるー！」

「ぶぎョイ」

動揺^{どうよう}のあまり口から変な音でた。

そんなつもりでは！

『キモモモモー。そーしくんキモモモモー！』

菓子ちゃんが俺の周りを飛び回る。白目になった。もう、この話題から逃げよう。逃げるためには、相手に質問を。

「ひ、ひりあちゃんは？」

聞いたあとで、さっそく後悔した。

あまりに自分とかけ離れていた場合を想像すると、怖かった。身長二メートルのガチムチマッチョとか、危なげな武闘派の男とか言われたら、なれる自信がない。一応筋トレくらいはしてみるかもしれないけれど、俺の身長は二メートルもいかないだろう。ドキドキしているとひりあちゃんが軽い調子で言う。

「わたしは、話しやすい人がいいなあ」

「そッ？」

「前は、話し上手な牛丼好きの人だったんだけど……最近変わったんだ……へへへ」

「そオなんだアア」

声がひっくり返った。心臓ドコドコうるさい。

「み、見た目とかは？」

「割となんでもいい！」

わーい！俺もあてはまる！

ひりあちゃんと会っていると、心臓が頻繁に大はしやぎする。

ひとしきり話して、ふっと沈黙が訪れたあとにひりあちゃんが言う。

「わたし、ネクラ君と話すの、本当に楽しい」

「え、あ、ありがとう」

俺のほうが百万倍楽しませてもらっている。感激に震えていると彼女はそこから少しだけ小さな声になって、ためらうような小さな沈黙のあと言葉を継いだ。

「……ネクラ君、すごく、話しやすいから……」

ネクラとヒリアの夏休み

◇ヒリア

夏休みの朝だった。

その日は朝から本当になにもかもがうまくいかなかった、最悪の連鎖をしていく日だった。まず、父が、仕事関係で家族みんなで泊まりがけでパーティに行く、お前も来いと言い出した。パーティなんて、行きたくない。どうせ牛井のひとも出ないパーティだ。

「行ってもすることないし！ わたし抜きでもいいでしょ！」

半ギレで友達と遊ぶ約束があると嘘をついて家を飛び出した。

日帰りでも苦痛なのに泊まりとか、ゾツとする。

お姉ちゃんのおさがりの、というかおそらく一度も着ていないうちにわたしのものになったワンピースを着て家を出てきた。

どこで時間をつぶそうか考えて、前一度降りた駅を探索してひとりで遊ぶことにした。こういうのは、切り替えが大事。よし、遊ぶぞ。

駅に着いて商店街を見てまわる。

通りの揚げ饅頭を買って食べて、用もなく雑貨屋にも入って、すごく楽しかった。

前来た時は豆腐屋さんがリヤカーで売ってたけど、今日は見当たらなかった。

まあいいか、納豆屋さんなら絶対買うけど。

商店街を抜けてちよつと歩いたところで雨が降ってきた。豪雨だ。

この辺から切り替えたはずのわたしの一日も雲行きがだいぶ怪しくなってきた。

雨のことなんてぜんぜん考えていなかったので、傘の持ち合わせもなく、あつという間にびしょ濡れになった。

うわ、服ちよつと透けてる。早くコンビニで傘買わなくちゃ。

来た道と逆の方向にそれらしき看板を見つけて急ぎ足で行くとつぶれていた。

なぜか探してる時には見つからないコンビニにやっと入ったときには雨は止んでいた。

駅からだいぶ離れた場所ですぶ濡れのわたしだけが残った。

帰るしかないかな。そう思って歩いていると、街灯から落ちた雨粒の塊がぼちやりとおでこを直撃した。わたし、ほんと反射神経ない。

前が見えなくて目をこすりながらヨロヨロ歩いていると、近くの建物の柵が壊れていて、そこに肩口をひっかけて、ビイッと嫌な音と共に、ワンピースが少し破ける。

信じられない。

なんか、すぐくついていない。せっかく出てきたのに、コントかよってぐらい、災いが連鎖して。しかし、この時はまだ笑っていられた。

脱力した笑顔が凍りついたのは、変なおじさんがわたしのあとをつけてるのに気づいた時だった。あの帽子の人、結構な距離を移動してるのに、ずっといるんだもん。たぶん、そう。これは笑えない。

もしかしたら偶然かもしれないし、気持ち悪いからさっさと撒いちゃおう。そう思っただ足になったら段差で足を捻って転んだ。ふくらはぎを地面で擦って、薄く血がにじむ。心臓がばくばくしていた。あ、これ、あとで腫れるやつかも。

なんとか痛みをこらえてヨロヨロ移動する。そうすると、不審なおじさんが追いかけるように後からついてくる。本格的に気持ち悪い。

早く諦めてほしい。

駅に戻るまでにある細くて人通りの少ない道を考えるとずっと早くに撒きたい。

目に入った喫茶店に入るとおじさんは窓の外でじつとわたしを見ていたけれど、やがて、店内に入ってきて、空いている一番近い席に座った。

どうしよう。これは、絶対危ない人だ。

家に電話しても、家族は遠くのパーティに行ってるので誰もいない。

たぶんいくらでも方法はあったけれど、焦っているの、冷静に頭も働いていない感じがした。

誰かに、頼りたい。でも、頼れる人がいない。

そう思った時、わたしの頭にある人が浮かんだ。

ネクラ君に、一度だけこの街の話をした時、彼が一瞬言いかけた言葉をわたしは覚えていた。

「そこ、俺の家」って言ってた。

そもそも、彼がこの街に住んでるんだって思ったから、今日だつてここに遊びにきたのだ。

ネクラ君に会いたい。助けてほしい。

なにもしなくてもいいから、今一緒にいてくれるだけでいい。

怖いし心細い。連絡したら、彼は来てくれるだろうか。そう思っただスマホを取り出す。顔も知らないのに、無理がある。今までの友情も無になる可能性もある。

それでも、わたしは今頼れそうな友達、ネクラ君しかいない。文面を作って送信ボタンに指をかけようとする。

おじさんは相変わずわたしをしつと見ていたけれど、ふいにスマホを構えた。写真を撮つてるのかも。そう思ったら鳥肌がぶわつとでた。

嫌悪感で席を立て、急いで店を出た。

なんでまたついてくるの。本当に気持ち悪い。

頭に血が昇って、急ぎ足でどこに向かうでもなくなるとか撒こうとしてめちゃくちゃに歩く。交番とかないかと探したけれど、焦っているので見つけられないばかりか、少し人気の少ない道に出てしまった。

背後の足音が急にペースアップした。

振り向くとおじさんが急ぎ足で接近してくる。わたしも走りたかったけれど疲れ切っていて、捻った足が痛む。ヨロヨロとしか前進できなかった。

このままだと追いつかれる。

頭が真つ白になった時、おじさんとわたしの間にリヤカーが勢いよく滑り込んできて、おじさんの腹と足にぶつかりおじさんは「げふ」と言って止まった。

その後からほかむりをした豆腐屋さんが来て、わたしと変質者の間に立ちふさがる。

「それ以上近寄るな。け、警察呼ぶぞ！」

豆腐屋さんはそう言って威嚇するようにばふとラッパを吹いた。

変質者がじろつと豆腐屋さんを見た。

豆腐屋さんがリヤカーに挿していたノボリを引っこ抜いて構えた。

武器としてどうなのかはともかく、おじさんは舌打ちしてどこかへ行った。

わたしと豆腐屋さんは変質者が見えなくなるまでじつと動かずに見ていた。

風が吹いて、豆腐屋さんのノボリがハタハタ揺れた。

その場に膝から崩れ落ちる。

豆腐屋さんは「はあ」と息を吐いてノボリを元に戻した。

そしてわたしに声をかけてくる。

「西園寺さん、大丈夫？」

「え、」

ほかむりを外して顔を見せたその人は佐倉君だった。

「あ、ありがとう……！ ありがとう！」

「その……大丈夫？ なんかされた？」

佐倉君は、服も破れて、ふくらはぎから血を流しているわたしをいたましい目で見ると、なにか、あったこと以上のものを想像されてるかも。

「あ、ずっと追いかけてただけで、特になにかされたわけじゃないの」

「よかった……」

「ご、ごめん。手をかしてもらえる？」

腰が抜けて、立ち上がれなかった。手を伸ばすと、佐倉君が自分の手をエプロンでごしごし拭いてから、引き起こしてくれた。

足がズキズキ痛む。

「佐倉君は……そんな格好でなにを？」

「バイト。警察行く？」

「……もう帰りたい……」

できれば行つたほうがいいとは思つたけれど、あまりにクタクタで、今日はもうこれ以上拘束されなくなかった。結局被害もなかったので、どうにかできるとも思えない。

ちらりと佐倉君を見る。

大して仲良くない、どちらかというやや陰悪なクラスメイト。学年のアイドル。しかもバイト中。こんな人にこれ以上頼れるよしもない。変質者を追っ払ってもらえただけで御の字だ。

「それじゃあ、本当にありがとう」と言つてぺこりとお辞儀して、歩き出す。足、ズキズキ痛い。落ち着いたらどんどん痛くなってきた。少しよろける。

しばらく行つたところで、ガラガラガラ、と背後から聞こえて、振り向くと佐倉君が追いかけてきていた。

「さ、西園寺さん、家の人呼ばないの？ 呼びなよ。来るまで一緒に待つてるよ」

黙つて首を横に振つた。なにかしゃべると泣きそうだったから。唇を噛む。

ぺこぺことお辞儀して、また、駅のほうに歩き出した。

「待つてよ。血が出る。服も……なにがあつたのかわかんないけど……さすがにほうつておけない」

「で、でも……」

佐倉君が思い切つたように口を開いた。わたしの目をまっすぐに見て言う。

「西園寺さん、俺のこと嫌いかもしれないけど、今だけ、助けさせてよ……」

「……っ」

いろんな想いが胸に溢れて、それなのにまともな思考にはならなくて、ただ、涙だけがぼろぼろと出てきた。

佐倉君が「駅こつちだよ」と言つてリヤカーを引き前を歩き出す。それでもわたしが動けずにいるとリヤカーを置いて戻ってきた。それから彼はポケットからスマホを出してどこにかけた。おつかれさまです、とか言つてるので、バイト先なのかもしれない。

また、風が吹いて、わたしは途中からその声を拾うことなく呆然としていた。通話を切った佐倉君がわたしのほうを見る。

「歩ける？」

「わかんない……足いたい……」

思わず呻く。さつきより痛くなってきた気がする。

「さ、西園寺さん、すぐく嫌だろうけど、おんぶしたほうが早い……」

「うう……重いし、湿ってるし、やだよね、ごめんね」

鼻声で言って、おんぶの体勢に入った佐倉君に抱きつくようにして、おぶわれた。

わたしの湿った服や髪の毛が、彼の肩や背中に生温かい体温を伴った湿り気を伝えていく。気持ち悪いだろうと思うのに、佐倉君は氣にした様子もなく、どんどん歩いていく。

「すぐだから。我慢して」

そう言われて、五分も経たないうちに目的地に着いた。

駅に行くのかと思いきや、少し手前で降ろされた。

顔を上げると目の前には古いお店があった。

『食堂 さくら』と書いてある。

佐倉君がガラガラと扉を開けて中に入ると明るい「いらっしやいませ」の声に迎ええら

れた。

「あら総士。バイトはどうしたの？」

「母さん、俺店代わるから、この子風呂にいれてあげてくれない？ あと足怪我してる」

「あらあらあらあら、服も破れてて大変じゃない。総士、あなたまさか……」

「俺じゃない!! 事情は聞いてないけど、クラスメイトなんだよ!」

佐倉君が言って、わたしは店から少し行っただころにあるらしい彼の家に、車で移動した。

◆ネクラ

西園寺さんが『お食事 さくら』とデカデカプリントされているハイエースに乗って少し離れた我が家へ向かったあと、しばらく店を手伝っていたけれど、お昼時を過ぎるとだいぶお客さんが減った。

西園寺さんが母親と店に戻ってきたのを見て、思わず目を剥いた。

俺が中学の時着ていたジャージ姿だったからだ。胸に『佐倉』と刺繍されているそれはボロボロで、色も褪せている。とどころころケバだっている。

「か、母さん!!」

「なあに？ あ、これ？ もうあなた着れないでしょう。ゆりあちゃんの服は肩口から破れてるし、今日はこれ着て帰ってもらうことにしたの」

目の前が暗くなった。

「西園寺さんになんてものを着せてんだよ……」

この人確か父親が有名お洒落ブランドの会社の重役とかなんとか。それが……こんなゴミみたいな布切れを身に纏わせて……ファッションの神に呪われてもおかしくない。

「え、あんたもう着れないでしょ」

「そういう問題じゃなくて！」

「佐倉君ごめんね。ちゃんとクリーニングして返すから」

西園寺さんがなぜかべこべこ謝ってくるので、それ以上の追及はやめた。

「足はどうなの？」

彼女のふくらはぎには大きな絆創膏と、足首には包帯が巻かれていた。

西園寺さんに聞いた質問に母親が答える。

「擦り傷が少しと、あとはねんざだと思うけど、だいぶ腫れてるの。ゆりあちゃん、湿布しただけだからあとで一応病院行きなね」

母親が戻ってきたので、俺は一旦その場を抜けて、標識に繋いでいたリヤカーを回収し

てバイト先に行った。幸いなことに朝入れてた分の豆腐は全部売っていた。簡単に事情を話してその日はあがらせてもらい、また店に戻った。

店では西園寺さんがサバ味噌定食を食べているところだった。

ああ、サバ味噌かあ、とぼんやり思ってた目を覚ます。

ん!? 西園寺さんが、サバ味噌!?

なぜ、テイラミスとか出さなかった！ 思わず母親のところに文句を言いに行く。

「なんで西園寺さんにサバ味噌なんて食べさせてんだよ」

「あら、ゆりあちゃんが選んだのよ」

西園寺さんが頷き「とても美味しいです」と、すごく可愛い顔で笑ってみせる。もちろん俺にはではなく、作った親父と世話した母親に対してだ。

西園寺さんは食べるのは遅かったけれど、ものすごく美味しそうに食べる。

付け合わせのイカとキュウリの酢の物とかも、ひとくちひとくち大事に味わって食べている感じがする。これは作ったほうも相当嬉しい客。ほかのお客さんはいなかったので親父もカウンターの奥で頬杖なんてついて嬉しそうに見ていた。

どさくさ紛れに「西園寺さん、これも食べなよ」とか言って、かぼちゃサラダとか、追加で出してきた。

うわ、女の子はそんなに食べないだろ。ダイエットとか。カロリーコントロールとか……というか、こんなオンボロの店のかばちやサラダとか……軽く引いていると彼女が小さいけれどはっきりした声で「いただきます」と言っただけで、俺は俺の中の女の子像及び西園寺さんが若干現実と乖離していることを知った。

西園寺さんは出されたものをすく綺麗に全部食べきって、お茶も全部飲んで「ごちそうさまでした」と言っただけ、と息を吐いた。

「ゆりあちゃん、送ってくね」

母が壁にかかった車のキーを手に取ったとき、お客さんがドヤドヤと入ってきた。

「全員座れるー?」

「あ、今、椅子動かしますね」

「俺がやる」

狭い店内でなんとか人数分の場所を調整して、西園寺さんを見ると立ち上がった母の前で頭を下げている。

「ごちそうさまでした。わたし足もう結構平気っぽいんで、大丈夫です! ありがとうございます!」

彼女がお客さんのほうをちらりと見ながら言うので、この店を両親だけで切り盛りしていることをなんとなく察したのだろう。

「あ、じゃあせめて総士、送っていきなさい」

「え、でも佐倉君も忙しい……」

断られそうなところ、母親が「遠慮しないで! 今日ひとり帰っちゃダメだから!」

と言って、ふたりで店を出た。

夏の午後の陽射しは強く、まばらに影になっている緑の下を選んで歩く。

「ありがとう。ほんとはちょっと、ひとりで帰るの嫌だった」

西園寺さんが、困ったように言う。

「家まで送っていくから」

「ありがとう。でも、家は駅からすぐだから。こっちの駅まで大丈夫」

心配ではあったけれど、そう言われると、食い下がるのも女の子の家についていきたくない変質者みたいで「わかった」と言うしかなかった。

怪我で歩みが遅くなっている西園寺さんに合わせるように斜め後ろをゆっくり歩く。

「う、わっ」

最初は慎重に歩いていた西園寺さんは、慣れてきて油断したのかもしれない。湿った靴

で足元を滑らせ、派手によろけた。

後方にそのまま頭をぶつけるんじゃないかというようなダイナミックなよろけ方に反射で腰を抱くように抱き留める。

びつくりした顔で振り向いた西園寺さんと、目があつた。

腰が、細い。シャンプーの甘い香りに混じって、生々しい汗の匂い、人間の匂いがした。動けない。

頭上で蟬の声がうるさかった。

西園寺さんがほんの小さな声で「あ、ありがとう」と言つたところで呪縛が解けた。不可抗力に近いとはいえ、申し訳ないことをした。

うしろめたさから、今度は少し離れて歩く。

気まずい。

しばらく行つたところで西園寺さんがほんの小さく振り返り、困つたように俺を見た。

「あの……『佐倉総士を見守る会』の方達に、言つただけ……」

「ごブウ」

思わずむせた。

な、なんだそれ。その猟奇的にダサイ名前の会。色々聞きたかったが、目を白黒させて

いるうちに、なぜか知つてるものとしてそのまま続けられる。

「色々誤解があつて……なぜかわたしに彼氏たくさんいるとか、佐倉君とこっそり会つてるとか、そんなこと言うから……」

「あ、なんか噂になつてたのか。それは、知らなかったとはいえ迷惑をかけた」

西園寺さんともあるう人が俺なんぞと噂になるなんて気の毒すぎる。

「わたし、佐倉君のこと、嫌いじゃないよ……」

西園寺さんがボソツと言う。心臓がばくんと跳ねた。

だからと言つて好きでもないだろうというのはわかるので、とりあえず「うん」としか返せなかった。

「あれ……彼氏五十人いるって、本当じゃないの？」

「ひとりもないよ」

「え、ええ！」

驚くと、西園寺さんは恥ずかしそうにした。どうも彼氏がないことを恥ずかしがつているようで、慌てたように弁解めいた口調で言う。

「でも、最近気になる人が……うん、好きな人はいるんだ。片思いだけど」

ミステリー感もなにもなく、ペロリと恋愛事情を打ち明けられて、拍子抜けした。

「西園寺さんに好かれるやつ、どんなやつ？」

西園寺さんが意外と普通で、なんだか妙に話しやすいのでつい、すんなり聞いてしまった。

彼女は聞かれて顔を思い浮かべたのか「えっ」と言って両手を頬に当てて赤く染めた。表情が、みるみるうちにとろけていく。

わあ……好きなんだな。

彼女にこんな顔をされる相手は幸せだと思う。

「面白くて、優しくて……あと、あと」

西園寺さんがニヤつきながら指折りしてる。激レア。

なんかたぶん仕事のできる大人のエリート。

IT企業の社長で日本と海外を飛びまわっている。見た人がバタバタ倒れるレベルのイケメンでハリウッド映画にも出てる。テストで百点以外とったことがないくらい賢い。話が上手くて聞いているとみんな笑いが止まらないし人が集まってくる。優しくて大金持ち。各国から求婚者殺到。俺の知らない世界のハイパーイケメンの話だ。

聞いていたらなんとなく、自分のことを思い出して言いたくなった。

「俺も……実は片思いしてて」

「え、片思い？」

ものすごくきょとんとした顔で意外な声を出される。

「佐倉君なら、さっさと言えばいいのに……断られたりしないでしょ」

「そんなことないよ。色々微妙な関係だから、壊したくないのもあって……」

「なんかすごいね。難しいんだね。やっぱり身分違いのお姫様だったりするの？」

「いや……」

だいたい見当違いな方向で想像されている気がした。

しかし、藪坂ぐらいにしか言っていなかった俺の初恋話を、まさかこの人にすることになるとは思わなかった。割と会話できている。それに、自分も向こうも好きな人がいることがわかると、変な誤解で嫌がられることもないから男女ならではの妙な警戒心も和らぐ。それで余計に話しやすくなった。

「佐倉君は、告白しないの？」

「え、まだ無理だな。西園寺さんは？」

「わたしは最近、言いたい気もする……」

「そっか。きつとうまくいくよ。がんばってね」

西園寺さんなら砕けることもなさそうだし、ものすごく無責任に背中を押した。

「うん、でも夏休みに入ってから……会えてないんだ」

「遊びに誘ってみればいいよ」

「えっ……」

西園寺さんは一瞬戸惑った顔をしたけれど、少し考えたあと、思い直したように頷いた。

「うん、誘ってみようかな……がんばる」

どんなに誘えばいい。こんな可愛い声に誘われて断る地球人はいないだろう。

というか今気づいたけど、西園寺さん、ひりあちゃんと声がちょっと似てる。

ひりあちゃんのほうがもう少し高くて明るい感じだけれど同類系の声質だと思う。

西園寺さんとはマトモに会話したこともなかったし、話し声をちゃんと聞いたこともろくになかったから気づかなかった。大発見。だから話しやすいのかも。

「佐倉君も……」

「え」

「佐倉君も、がんばって」

「うん。ありがとう」

思わぬことでなんかちょっと、西園寺さんと友達っぽくなってしまった。

思ったより話しやすい。それに、ひりあちゃんとは話せない。好きな人の話」ができた

のがちょっと新鮮で楽しかった。

＊

明け方近くに蒸し暑さで目を覚ます。

エアコンはタイマーで切れるので、夏の朝のむわつとした暑さにもうやられて、とても寝続けてはいられない。

ボロい家の汚い洗面台で顔を洗って歯を磨く。

部屋に戻って寝巻きのジャージから着替えて今日はバイトないし店の手伝いして……勉強して……いつもと変わらぬつまらぬ予定を頭で反復していると、机の上に置いてあったスマホが震えた。どうせ藪坂あたりが最近観たエロ動画の感想でも送りつけてきたんだろうと適当に指を滑らせる。

そこには大天使ひりあちゃんからのメールがあった。

件名は『夏休み、遊ぼう！』。

脳天をから割られるような衝撃で一気に目が覚めた。衝撃で腰が抜けて尻餅をつく。尻の下にあったビニール袋でさらに滑って背後にあったゴミ箱にぶつかる。スコンと音がしてゴミ箱が倒れゴミが辺りに散らばった。

ゴミの中で倒れながら、俺はスマホを持った手を高々と掲げて読んだ。

『金曜日、会えないかな』で始まるそのメールに、即答で是の返事をした。

ひりあちゃんからの誘いを断るなんて選択肢はない。

ゲームなら四つくらい選択肢が出てもすべて内容が同じだろう。

そうじゃなくても夏休みど真ん中のこの時期、糞暑くてバイトの疲れも溜まってきているこの頃に、好きな女の子の声が聞けるなんて、生きててよかったどころの騒ぎじゃない。

ひりあちゃんに、会える！

むくりと半身を起こしてゴミをゴミ箱に戻す手も軽やかだ。

あれ？

冷静に考えたら、顔を合わすということになる、のだろうか。

ずっとはぐらかしてきたけれど、お互い正体を明かす時が来たということだろうか。

俺は勢いよく立ち上がり、膝で再びゴミ箱を倒した。そのまま階段を降りて母親に叫ぶ。

「母さん！ 俺今日、店手伝えない！」

「あらどうしたの」

「ちよっと急用が！ 親の敵討つレベルの急用が」

「まだ生きてるから敵は討たなくていいわよ」

「とりあえず、今日出かける。バイトも休みだし、今日しかないから」

「珍しいね。伊織が今日は暇らしいからお店は大丈夫。あなたもたまには羽伸ばしてきなさい」

「あ、兄ちゃんが暇なんて珍しいね」

「あの子いつも女の子とデートばかりしてるからねえ……。総士は？ あなたも可愛い顔してるのに……彼女とかいないの？ あ、ほら西園寺さんとか！」

「母さん……西園寺さんが俺なんか相手にするわけないだろ」

「え、あの子、総士にいいと思うけどなあ」

「なに見て言ってるの。釣り合いがとれてないだろ。あの人はすごい……とてもすごい人なんだからな！」

「私にはあなたのほうがなにか色眼鏡で見てるように見えるけどねえ……朝ごはん食べてくでしょう」

頷いてご飯をよそう。

冷蔵庫から納豆を出す

と母親が朝ご飯用の茄子のお味噌汁と、大葉と鰯節の入った玉子

焼きをテーブルにのせてくれた。

店で飯を作るのは父だけれど、家の飯は母が作る。

「私も、もうお店行くけど、お昼はどうするの？」

「おにぎり握にぎってく」

外で食べるとお金がもったいない。学校がある時は親も俺も時間がないので菓子パンですますことが多いが、今日は作る時間くらいはある。

朝食をとったあと急いで簡素な弁当を作り、皿を洗って外に出た。

とりあえず、待ち合わせの駅に行ってみよう。

ひりあちゃんが指定してきたのはずいぶん寂れた駅だった。

周辺にもっと大きな楽しい駅はたくさんあるのに。なにか意味があるんだろうか。

降り立ってその、のどかさというか、賑にぎわってなさに拍子抜けした。

今日も暑い。立っているだけで脳天から汗あせがふきだす。

俺は久しぶりに脳内の菓子ちゃんを呼び出した。

菓子ちゃん、菓子ちゃん、俺、金曜女の子とデートなんだ。どこに行けばいいかな。

くるりんとそこに登場した菓子ちゃんが答える。

『女の子はー、まちがいないくパフエが好きー!』

でも、ひりあちゃんの好きなのは納豆と牛丼ぎゅうどんなんだよ？

その質問には菓子ちゃんは答えず、カサツと音を立てて顔を隠かくした。そして新たに叫ぶ。

『女の子はー、歩かされるのがきらいー!』

え、でも俺には車もないし、歩くしかないよ。距離きょりの問題かな？ 何キロくらいまでなら歩いて平気かな？ 十キロは、歩かせすぎかな？ 九キロ未満で設定すればいいかな？

『ぶつぶー！ 正解は七・五キロまでです!』

菓子ちゃんは自信満々だ。自分の心の化身けしんでありながら、よくわからない。でも七・五キロということにしておこう。

『検索けんさく検索ー！ デートスポーツはー検索がきほんー』

でも、なにを調べればいいの？

『相手の好きなものを、リサーチー！ 好きなものが食べれたり、遊べたりするところに連れていってくれるひとに、女の子はめろりーん!』

そ、そうか。ひりあちゃんの好きなものを俺は知っている……! 好きなものが食べられるお店にスマートに連れていけば好感度うなぎ登りはまちがいないし

これだ! 女の子らしく、かつ、好物にも即そくしている。これしかない!

勢い込んでそのお店に行ってみると既につぶれていた。

そうだろうな……。

菓子ちゃん、俺、自信ない……。

歩行を七・五キロ以内で収めて、このへんぴな駅周辺で楽しい場所に連れていく自信、

ない。

『あきらめちゃダメー！ 楽しくなければムードのある場所だよー！』

わ、わかったよ。でも、ムードのある場所なんて、そもそもアミューズメントスポットがこの駅周辺にはまるでないんだよ。

『よく探してー！ きつとあるから！』

あ、駅の裏側にラブホテルがたくさんあるみたいだよ。ムード！ あるのかな？！

『そんなとこ誘ったら口もきいてもらえなくなるぞ、ゴミ虫め』

菓子ちゃんもはやほとんど俺の声と口調で即座に否定した。わかってる。わかってるよ。ていうか、俺が誘えるはずもないじゃないか。ラブホどころかコンビニにだって誘えないのに。

検索してもろくな情報がないから地図を拡大縮小させまくって念入りに探す。

範囲を広くして調べながら歩いていたら、駅からギリギリ七・五キロ以内で行けるところに広めの公園があった。中に入ると遊具もほとんどなく、緑が多め。子供の多い公園ではない。しっとりとした落ち着いた雰囲気。

これはいいかもしれない。

念のため検索してみるとハッテン場としてよくつかわれてる公園だった。

駄目。駄目に決まっている。お互い邪魔になる。

菓子ちゃん、どうしよう。

蟬のぬけがら集めごっこくらいしか浮かばない。

菓子ちゃんがカサカサクルリと回転して言う。

『こまったときはー』

こ、困った時は？

菓子ちゃんはパソコンの考え中表示みたいにしてはくクルクルとまわっていたが、やにわに声を出す。

『ドトールー！』

ドトール？ わかった。女の子はそこが好きなんだね。……好きなんだよね？

菓子ちゃんがカサカサ揺れながら『ドトール』『ドトール』しか言わなくなったので、それ以上、街の探索は諦めた。

最後にひりあちゃんが書いてきた待ち合わせ場所を確認しにいった。

当日迷うとよくないし。

待ち合わせ場所は、駅近くにある公園。

——その、遊具の中。

◇ヒリア

それを思いついたのは幸運な偶然だった。

休日の冒険として降りた小さな駅で、たまたま見つけた公園。

その中の遊具のひとつが大きな、とても大きなたんとう虫の形をしていた。

近寄ると水玉模様の円は、いくつかり抜かれている。そこから空洞となつて入る。そして、入ってみると内部は中央で仕切られていた。

これは完璧。

第二図書室と同じ構造だ。入口が両方にある分進化系とも言える。

素晴らしい。わたしはここをネクラ君との会合場所に使うことにした。

これなら夏休みに外で会える。最高だ。メールで誘うとふたつ返事で了承を得た。

わくわくしながら待ち合わせ時間より早く行つて、中に潜り込む。顔を合わせないでむように、時間は五分ズラして伝えた。

『時計寄りのほうから入ったから反対から入ってね』

メールして、ドキドキしながら待っていると、すぐに返信があった。

『もう中にいる』

「え、いつから？」

思わず声をあげた。着いているなら、連絡すればいいのに。

同じ入口から入ったら大変なのに。いや、でもないってことは反対側。

「ネクラ君？ いる？」

反対側から「う、うん。いるよ」との声が返ってきた。声を通るかそれだけが心配だったけれど、よかった。これなら充分会話できそうだ。

「久しぶりだね！」

「うん、元気してた？」

「うん！ ここならさ、ほら、お互い顔も見せずに話せると思って！」

「うん、そ、そうだね」

「あははっ、声が響くね」

声が、低い天井に反響して変な感じ。ていうか、ものすごく暑い。

今日は気温は低いほうだけれど、それでも遊具の中はむわつとした熱気がこもっていた。

「ひりあちゃんは夏休み……わっ」

「オマエダレダー」と子供の声が聞こえる。

どうやら反対側別のお客さんが入ってきたらしい。

「うわっ、やめろ、ひっぱるな」

「誰だー！ オマエ！ ぎやははー！」

子供に乱暴をするわけにもいかない。しかし、なにか酷い目にあわされている気がする。ネクラ君！ がんばれ！ なんとか！

ネクラ君はたつぷり五分は子供達のオモチャにされていた。

笑い声が大きく反響してよくは聞こえなかったけれど、なんとかキックとか、ライダー系の必殺技もくらっていた。

愉快な音声がその間ずっと聞こえていたけれど、やがて「ゆうとくーん！ ご飯だよー！」と声が聞こえて三人ほどの子供がバラバラと公園の外に向かって駆けていくのが見えた。

「だ……大丈夫だった？ だいぶ成敗されてたけど」

「う、うん……大丈夫。大した成敗じゃなかった」

「ごめんね、いい場所だと思ったんだけど……」

「いや、素晴らしい場所だと思うよ！ ひりあちゃんはさすがだよ！ 天才的だよ！」

「えへへ……ありがとう。でも暑いね」

「蒸すよね」

しばらくは夏の遊具の中の暑さについて話をしていたけれど、唐突に空腹を覚える。お昼時だ。お腹減った。興奮して朝は食べてない。

よく考えたら一緒に食べにもいけないのに、なにかお腹に入れてくるべきだった。遊具の構造にはしやぎ過ぎて、ほかのことに対して色々無計画でずさんだった。

「お腹減ったあ……」

思わずそうこぼすと向こう側でファスナーがジツと開くような音が聞こえた。

「あるけど食べる？」

「え、なにを？」

「……」

「もしかして焼きそばパン？」

最初に会った時、彼はなぜか焼きそばパンを持っていた。

「……おにぎり」

ネクラ君はなぜか決まり悪そうな声で言った。

「コンビニかなんかで買ったの？」

「……いや、俺が朝、あとで食べよう……作った……んだけど……いやだよね!？」

「え、ええっ！ 食べる！ 食べたい食べたい！」

「ほ、本当に？ そしたらちょっと待って」

しゅた、ごいんごいん、ペそ。ごいん。じやり。

いくつかの音のあと「てっぺんに置いたよ」と声がかけられる。

ドキドキしながら外に出ると、自分が汗だくだったのがわかる。外気に触れた服がぐっしょりして、スースーする。

てんとう虫のてっぺんを見ると、ラップにくるまれたおにぎりがちよんと置かれていた。壁面の凹凸にしゅた、と足をひっかけて、ごいん……ごいん……ごいん、ごいんと四回ほど上にあがる。宝物はもうすぐそこだ。おにぎりを間近で見てもたびつくりする。

「すごいよネクラ君！ これ本当にネクラ君が作ったの？ こんな綺麗で形のいいおにぎり、売りに出せるよ！」

お米はつやつやで、すっごく形がよくて、綺麗な三角。海苔は下の部分にだけ巻いてあるスタイル。ほんの少しひんやりしているのは保冷剤でも入れていたのだろうか。

おにぎりを持ってそろそろと下に降りて、またてんとう虫の中に戻る。

中身はなんだろうとひとくちかじると、塩加減も絶妙。ご飯もふくらとしていて、水っぽすぎない。こんな美味しいおにぎり、わたしは食べたことがない。いや、よく考えたらわたしはおにぎり自体ほぼ食べずに生きてきたから、もしかしておにぎりってこんなに

美味しい食べ物だったの？ え、試しに帰りにコンビニのおにぎりも買ってみなくては。

具は明太ツナマヨネーズだった。

明太子とツナマヨの割合、米とのバランスも素晴らしかった。

「美味しい……おいっしい」

ひとくち飲み込むたびに言葉がもれる。

なにか半月ぶりのマトモなご飯にありついた旅人のようにがつついてしまう。

「おにぎりの型とラップ使ってるから……そんなに触ってないから！」

ネクラ君がなぜか焦った声で伝えてくる。悪いけれどこの瞬間はちゃんと聞こえていなかった。

「はあ、美味しかった……もっと食べたい……」

「え、本当に？ あとひとつあるよ」

「食べたい！」

欲望のままに言ったあとで、それはネクラ君の分だということに思いあたるが、気がついた時にはしゅた、ごいんごいん、ペそ、ごいん、じやりとすばやく音が響く。

なんとなく、もうちよっとどんくさい子を想像していたんだけど、ネクラ君、意外と運動神経ありそう。少なくともわたしはこのリズムでは登れない。

「いいよ」と聞こえて外に出る。

また、回復アイテムがアイテムポイントに復活していた。

そろそろとてつべんまで行ってそれを取って降した。

なにこの、見ただけで食欲をそそる美しい形。芸術的すぎる。

こんなの作れるだけで相当モテるような気がする。

手に持っているだけでヨダレが出そうになるが、落ち着いて深呼吸。

「あのー、これネクラ君の分……」

「俺、お腹減ってない！ 減ってないんだ！」

ものすごく疑わしい言葉が慌てたように飛んでくる。

どうしよう、おにぎり、返したほうがいいかな。

まさか、人生でおにぎりの返却について悩むことになるとは思わなかった。

どうしよう。

でも、これはやっぱりネクラ君の分だし……やっぱり。

……やっぱり美味しいなあ。

葛藤していたはずが、気がついた時には口の中に幸せが満杯に詰まっ
ていて、笑顔で青
くなった。

しまった。

このおにぎりが美味しすぎるのが悪いのだ。でも、一度口に入れたものを返すわけには
いかないよね。だから食べていいよね。美味しいな。

「ごちそうさまでした。ありがとう。本当に美味しかった」

「え、もう食べちゃったの？」

「美味しくて……ぺろりだった」

ネクラ君はお米の国の……王子様だ。しみじみ惚れ直す。

「わたし、お昼のことなにも考えてなかった。ごめんね、誘っておいて」

しかも、欲望に耐えられずネクラ君の分までむしゃむしゃ食べて。割と最悪なことをし
ている。

「ぜんぜん気にしないで！」

「本当にごめん、美味しくて……美味しかった」

「あんなのでよければいつでも作るよ」

「ほっ、ほんとにー？」

何百個発注しよう。楽しみすぎる。

「ネクラ君は、夏休みなにしてた？」

「俺はバイトばかり」

「……バイト先って、女の子とかいるの？」

「へっ？」

うわ、嫉妬心丸出しで変なこと聞いちゃった。恥^はずかしい。身悶^{みもだ}えていると、だいぶ長い時間^たが経^たった。

向^むこうで寝^ねているんじゃないかと思^{おも}いだした頃^{ころ}、簡素な返事が返ってくる。

「……いない」

わたしは、なんだか恥^はずかしくて「うん」としか答えられなかった。

続きは、7月17日発売のファンタジア文庫で！

©Ten Murata, Sakko 2020